

樽沢村元(3)遺跡

— 常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2023年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、令和3年度に常海橋銀線道路改築事業予定地内に所在する樽沢村元（3）遺跡の発掘調査を実施しました。

周辺に残る森林や果樹園地内ではオオタカ、ハチクマ、フクロウなど希少な猛禽類の生息・繁殖が確認されており、豊かな自然環境を今も残しています。

西方に岩木山を望む段丘上に位置する本遺跡は調査の結果、縄文時代の遺物の他、平安時代の遺構や遺物が見つかり、10世紀前半を主体とした遺跡であることが分かりました。平安時代の中頃になると生業の一つとして鍛冶を行いながら人々がこの地で生活を営んでいた可能性が高いことが分かりました。

この調査成果が今後、地域の歴史を理解する一助となり、また、埋蔵文化財の保護のために広く活用されることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

令和5年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 和田和男

例 言・凡 例

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による常海橋銀線道路改築事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが令和3年度に発掘調査を実施した青森市樽沢村元（3）遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は、1,700 m²である。
- 2 樽沢村元（3）遺跡の所在地は青森県青森市浪岡大字樽沢字村元地内、青森県遺跡番号は201445である。
- 3 発掘調査及び整理作業・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 4 本書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間 令和3年5月11日～同年7月16日

整理・報告書作成期間 令和4年4月1日～令和5年3月31日

- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター笹森一朗文化財保護主幹が担当した。依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。発掘調査成果の一部は、ホームページ、発掘調査報告会（紙上報告）等において公表しているが、それらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書が優先する。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

水準点・基準点測量 株式会社 知立造園CUBIC事業部青森営業所

遺構の測量 株式会社 知立造園CUBIC事業部青森営業所

遺跡の航空写真 有限会社 無限

遺物の写真撮影 有限会社 無限

遺物写真の切り抜き 株式会社 知立造園CUBIC事業部青森営業所

- 7 遺跡周辺の地形及び地質、火山灰分析の原稿は佐々木実調査員（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科）に依頼した。

- 8 石器の石質鑑定は佐々木実調査員（国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科）に依頼した。

- 9 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。

- 10 測量原点の座標値は、世界測地系（JGD2011）に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて座標北を示している。

- 11 遺構については、種別を示す略号を用い、検出順に番号を付した。今回の調査で使用した略号は以下のとおりである。

SI：堅穴建物跡 SD：溝跡 SK：土坑 SB：掘立柱建物跡 SP：柱穴・ビット

- 12 遺物については、種別ごとの略号を付した。略号は、以下のとおりである。

J：縄文土器 S：石器 H：土師器 SE：須恵器 T：陶磁器 F：鉄滓

- 13 火山灰の略称は以下のとおりである。

B-Tm：白頭山-苦小牧テフラ

- 14 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。各土層の色調表記等は、「新版標準土色帖2011年版」（小山正忠・竹原秀雄）を基に記録した。土層断面図には水準点を基にした海拔標高を付した。

- 15 掘図中の遺構平面・断面実測図の縮尺は、1/20・1/30・1/40・1/80・1/90での掲載を基本としたが、版面に収まらない長大、或いは広範囲に存在する遺構については適宜縮尺を変更した。地形図・遺構配置図等についても適宜縮尺を変更し、各掘図中にスケールを示した。
- 16 遺構実測図に使用した網掛けは下記のとおりである。



断面実測図：火山灰範囲

- 17 遺構の規模に関する計測値は、原則として現存値を記載した。
- 18 遺物実測図の個別番号は、図版毎に1から通し番号を付した。
- 19 遺物実測図の縮尺は、土器・陶磁器1/2、剥片石器2/3、礫石器1/2、鉄滓1/2を原則とし、各図版にスケールを示した。また、遺物実測図に使用した網掛けは下記のとおりである。



礫石器：磨面範囲

土師器：内面黒色処理・外面変色範囲

須恵器：外面火搾範囲

陶磁器：断面

※須恵器断面は黒塗りとした

- 20 各遺物写真には遺物実測図と共通の図番号を付しており、縮尺は不同である。
- 21 出土した縄文時代の土器は、土器型式が明らかであるものはそれを用いた。土器の器種名は「形土器」を省略し、深鉢・鉢などと記した。
- 22 出土した縄文時代の石器は数や器種が少なかったため以下のように分類した。
- 剥片石器：二次加工や微細剥離が施されていないものを剥片とした。
- 礫石器：磨面を主体とするものを磨石とした。
- 23 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 24 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関等からご協力、ご指導を得た。
- 青森市教育委員会、弘前市立博物館、株式会社建設環境研究所、成田琢也

目 次

序

例 言・凡 例

目 次

挿図目次・表目次・図版目次

第1章 調査概要.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査・整理の方法.....	1
1 発掘調査の方法.....	1
2 整理・報告書作成作業の方法.....	2
第3節 調査及び整理体制.....	2
1 発掘調査体制.....	2
2 整理作業体制.....	2
第4節 作業の経過.....	3
1 発掘作業の経過.....	3
2 整理・報告書作成作業の経過.....	4
第2章 遺跡の環境.....	5
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	5
第2節 遺跡周辺の地形及び地質.....	10
第3節 基本層序.....	14
第3章 検出遺構と出土遺物.....	15
第1節 概要.....	15
第2節 検出遺構.....	15
1 第1号竪穴建物跡.....	15
2 第1号溝跡.....	16
3 第3号溝跡.....	16
4 第4号溝跡.....	17
5 第1号土坑.....	17
6 第1号掘立柱建物跡、柱穴・ビット.....	18
第3節 出土遺物.....	18
1 縄文土器.....	18
2 石器.....	19
3 土師器・須恵器.....	19
4 鉄滓.....	19
5 陶磁器.....	19

第4章 自然科学分析	36
第1節 遺跡出土の火山灰	36
第5章 総括	39
第1節 平安時代の遺構	39
1 挖立柱建物と外周溝が付随する竪穴建物跡	39
2 屈曲部を有する溝跡	39
3 挖方底面に工具による掘削痕を有する遺構	40
第2節 各時代の土地利用	41
1 縄文時代	41
2 古代	41
3 近世	41
4 近・現代	41
引用・参考文献	42
図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 遺跡位置図	7
図2 路線図・調査範囲と遺跡周辺の現在の地形	9
図3 (a) 樽沢村元（3）遺跡周辺の地形図	12
(b) 周辺の地形段彩陰影図	12
図4 (a) 地質柱状図	13
(b) 地点A	13
(c) 地点B	13
(d) 地点A、地点Bの位置図	13
図5 基本層序	14
図6 グリッド及び遺構配置図	20
図7 第1号竪穴建物跡（1）	21
図8 第1号竪穴建物跡（2）	22
図9 第1号溝跡	23・24
図10 第3号溝跡	25・26
図11 第4号溝跡	27
図12 第1号土坑	28
図13 第1号掘立柱建物跡、柱穴・ビット（1）	29
図14 第1号掘立柱建物跡、柱穴・ビット（2）	30
図15 出土遺物（縄文土器）	31
図16 出土遺物（石器）	32

図17 出土遺物（土師器1）	33
図18 出土遺物（土師器2）	34
図19 出土遺物（須恵器・鉄滓・陶磁器）	35

表目次

表1 樽沢村元（3）遺跡と周辺の遺跡一覧	8
表2 縄文土器觀察表	44
表3 石器觀察表	44
表4 土師器・須恵器・陶磁器觀察表	44
表5 鉄滓觀察表	44

図版目次

図版1 航空写真	45
図版2 調査区	46
図版3 第1号竪穴建物跡（1）	47
図版4 第1号竪穴建物跡（2）	48
図版5 第1号竪穴建物跡（3）	49
図版6 第1号溝跡（1）	50
図版7 第1号溝跡（2）	51
図版8 第3号溝跡（1）	52
図版9 第3号溝跡（2）	53
図版10 第3号溝跡（3）	54
図版11 第4号溝跡	55
図版12 第1号土坑	56
図版13 第21・22・23・25号柱穴・ピット（第1号掘立柱建物跡）	57
図版14 第24・26・27号柱穴・ピット	58
図版15 出土遺物（1）	59
図版16 出土遺物（2）	60
図版17 出土遺物（3）	61
図版18 出土遺物（4）	62

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

常海橋銀線道路改築事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成22年度から青森県県土整備部道路課及び東青地域県民局地域整備部（以下「事業者」と）と青森県教育庁文化財保護課（以下「文化財保護課」）が継続的に協議・現地確認を重ねてきた。用地買収や立木伐採等上物撤去の進捗状況に合わせて文化財保護課が令和2年度に試掘調査を行った。試掘調査の結果、複数のトレンチから遺構が確認されたことにより周知の埋蔵文化財包蔵地の新規登録が行われた（樽沢村元（3）遺跡）。

この結果を受け、再度事業者と文化財保護課との間で協議を行ったが、事業地内での遺跡の現状保存が困難であることから工事優先箇所や他事業との調整を経て、令和2年度以降に本発掘調査を計画し、青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当することとなった。

樽沢村元（3）遺跡に係る土木工事等のための発掘調査に関する通知書は、令和3年3月15日付けで東青地域県民局長から提出され、青森県教育委員会教育長が令和3年3月22日付け青教文第1394号で工事着手前の本発掘調査（記録保存調査）の実施を通知している。

第2節 調査・整理の方法

1 発掘調査の方法

令和3年度の発掘調査は、令和2年度に行われた文化財保護課の試掘調査の結果を受けて示された調査区（工事用センター杭No.240～244間）で行うこととなり、遺構・遺物の検出に主眼をおいて進めることとした。

〔測量基準点・水準杭の設置・グリッド設定〕 遺構測量等に用いた測量基準点は、調査区内に新規に設置した基準点及び水準点を用いた。基準点からの測量に支障が生じた場合、調査区内の任意点に座標を移動し使用した。樽沢村元（3）遺跡の調査グリッドは世界測地系による国土地理院を基準として4×4mで設定した。原点は平面直角座標値X=80156、Y=22820とした。原点の西から東方向にアルファベット（A～Y）を、北から南方向に算用数字（1～25）を付し、組み合わせで「A-1」、「…」、「Y-25」のように表し、グリッドの名称は南西隅で代表させた。

〔基本層序〕 基本層序は、試掘調査の結果を踏まえ、周辺地形の状況も把握できるよう調査区南東部及び延長線上の壁面で観察し、上位から順に第Ⅰ層、第Ⅱ層、…、第Ⅷ層までローマ数字を付した。

〔表土及び遺物包含層の調査〕 表土の除去作業は、試掘調査の結果を踏まえ、一部では重機を利用して掘削の省力化を図った。調査で出土した遺物については適宜グリッド毎・層位毎に取り上げた。

〔遺構の検出・精査〕 遺構の検出は、基本層序の第Ⅱ～Ⅳ層で行った。検出遺構は原則として確認順に番号を付して精査し、堆積土層観察用のセクションベルトは遺構の大きさに応じて適宜設定した。

〔写真撮影〕 35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び約2,620万画素のデジタルカメラ、1,605万画素のコンパクトデジタルカメラを併用し、遺構の検出状況、発掘作業状況等について記録した。また、ドローンによる遺跡及び調査区全体の空中写真撮影も行った。

2 整理・報告書作成作業の方法

【図面類の整理】遺構は、(株) CUBIC製「遺構実測支援システム」及び簡易造り方測量で作成した平面図と堆積土の土層断面図の調整を行った。図面の測量点等については、エクセルファイル(.xlsx形式及び.csv形式)でHDD及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

【写真類の整理】35mmモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムは撮影順にネガアルバムに整理収納した。デジタル写真は撮影内容を示すファイル名に変更した上で内容毎に整理し、HDD及び長期保存用ブルーレイディスクに保存した。

【遺物の洗浄・注記と接合・復元】洗浄後の遺物の注記は、調査年度、遺跡名、遺構名・グリッド、出土層位を略記した。直接注記できないものは、収納した袋に記載した。

【報告書掲載遺物の選別と観察・図化】土器は、時期・型式毎に分類したうえで、それぞれの特徴を良く表す資料を主として選別した。石器は器種毎に分類したうえで遺存状態が良く同類の中で代表的な資料を選別した。

【遺物の写真撮影】業者に委託して実施した。実測図では表現しがたい質感や製作技法、文様表現等を伝えられるように留意して撮影した。

【自然科学分析】遺構が造られ、また廃絶された時期を推定するため、堆積土中の火山灰の同定を行った。

【遺構・遺物のトレース、写真図版、版下作成】トレースは、(株) CUBIC製「遺構実測支援システム」、Adobe社製Illustratorを用いて行った。遺物写真の切り抜きは委託で行った。写真図版はAdobe社製Photoshopで加工・調整した。版下は主にAdobe社製Illustratorを用いて行った。

第3節 調査及び整理体制

1 発掘調査体制

発掘調査体制は以下のとおりである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 葛西 浩一 (令和4年3月 定年退職)

総務GM 油布 恵美

調査第二GM 斎藤 岳

文化財保護主幹 笠森 一朗 (発掘調査担当者)

文化財保護主事 長谷川 大旗 (発掘調査担当者)

専門的事項に関する指導・助言

調査員 斎藤 淳 中泊町博物館館長 (考古学)

〃 佐々木 実 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師 (地質学)

2 整理作業体制

整理作業体制は以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

所長 和田 和男

総務GM 油布 恵美

調査第一GM 鈴木 和子
文化財保護主幹 笹森 一朗（報告書作成担当者）

専門的事項に関する指導・助言

調査員 瘢藤 淳 中泊町博物館館長（考古学）
〃 佐々木 実 国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科講師（地質学）

第4節 作業の経過

1 発掘作業の経過

樽沢村元（3）遺跡の発掘調査は、令和3年5月11日に開始し、同年7月16日に終了した。発掘作業の経過は以下のとおりである。

〔令和3年度〕

5月11日～ 発掘調査器材等を現地へ搬入し発掘調査を開始した。調査基準点については新たに設置した基準点に基づいて4m単位のグリッドを設定した。水準点についても新たに設置した水準点に基づき調査区内に適宜設置した。

5月中～下旬 遺構検出、遺物取り上げ作業を行った。調査区から小谷を挟み北東に広がる森林ではオオタカやハチクマといった猛禽類の営巣場所がモニタリング調査により複数箇所で確認されている。今回の発掘調査区は確認された猛禽類の繁殖巣から半径500m以内に位置しており、何らかの配慮が必要な暫定区域とみなされている。発掘調査が行われる5～7月はオオタカ・ハチクマの営巣地での抱卵期から巣内育雛期と一致し、かなり敏感になる時期とされている。発掘調査による猛禽類の繁殖へ及ぼす影響を低減するための保全措置として、これまでの実施例を参考に段階的に重機を稼働し作業量を徐々に増加させる「コンディショニング」（工事への馴化）を行った。また、継続したモニタリング調査により猛禽類の繁殖行動に異常が確認された場合、発掘調査の休止も含め学識者の指導を踏まえ対応することとした。

6月～ 遺構が路線内の調査区外に延びることが判明した。協議の結果、杭No240から西側に2m、調査区を拡張することとなった。遺構検出、遺構精査、遺物取り上げ作業を行った。また、重機稼働時はその都度コンディショニングを行った。猛禽類のモニタリング調査は継続して行われた。

7月～ 検出した遺構の精査、遺物取り上げ作業を行った。また、重機稼働時は引き続きコンディショニングを行った。猛禽類のモニタリング調査は継続して行われた。

7月15日 発掘調査器材等の片付け・清掃を行った。

7月16日 発掘調査器材・出土遺物等を県埋蔵文化財調査センターへと搬出し、すべての作業を終了した。

この発掘調査期間を通じたモニタリング調査の結果、猛禽類の繁殖行動に異常は見られなかった。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は令和4年4月1日から令和5年3月31までの期間で行った。発掘調査では平安時代の竪穴建物跡1棟、溝跡3条、土坑1基等の遺構を検出し、縄文土器や石器、平安時代の土師器、須恵器、鉄滓等、段ボール箱換算で1箱の遺物が出土している。樽沢村元（3）遺跡は縄文時代と平安時代の複合遺跡であるが、主体は平安時代の集落であることを踏まえ、整理作業の工程を計画した。報告書の内容については遺構や遺物の特徴、調査段階やその後の所見を検討して記載することとした。

整理・報告書作成作業の経過は以下のとおりである。

〔令和4年度〕

- 4～5月 出土遺物の計測・接合・復元作業を行った。
- 6月～ 出土遺物の図化作業を行った。
- 7～8月 出土遺物の図化作業、遺構図面の修正作業を行った。
- 9月～ 遺構図面の調整作業を行った。また、遺構図面のトレース作業を開始した。
- 10月～ 遺構図版及び遺構写真図版作成作業を開始した。
- 11月～ 各種図版作成作業及び報告書掲載遺物観察表の作成を開始した。また、これまでの調査成果を検討し報告書の原稿作成を開始した。併行して遺物写真撮影を行った。
- 12～1月 遺物写真図版を作成した。また、原稿・版下が揃ったので報告書の割り付け・編集作業、印刷業者の選定、契約事務が完了した後、原稿及び版下を入稿した。
- 2月～ 校正、及び出土遺物・記録類の整理を行った。
- 3月15日 3回の校正を経て、報告書を刊行した。
- 3月下旬 記録類、出土遺物等を整理して収納した。

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

樽沢村元（3）遺跡は、青森市南部にあり、青森市役所浪岡庁舎から西方へ約2.5kmに位置する。梵珠山地の南端部に発達する段丘上に立地し、標高は32m前後を測る。現況はりんごを中心とした果樹園として利用されている。調査区を含む一帯は標高35.5mを頂点とし、西から東に向かいやや傾斜している。東端には本遺跡の西方に位置する熊沢溜池方面へ湾曲しながら延びる小谷が形成されており、段丘面との比高差は約4mを測る。小谷の平坦面では平成17年まで水田耕作が行われていた。

本遺跡及び周辺の遺跡の位置を図1に、遺跡一覧を表1に示す。本遺跡を含む段丘上や、それに続く微高地・沖積地には数多くの遺跡が所在している。

浪岡・常盤地域（旧南津軽郡浪岡町・同常盤村）では、昭和59年度から国道7号浪岡・常盤バイパス建設事業に伴い縄文時代の遺構や古代の集落が数多く検出・調査された。それらの多くは本遺跡の東方約1.5kmに所在する道の駅みなおかアップルヒル付近から北へ全長約3.2kmの間、大沢迦川右岸に沿う丘陵縁辺部の広範囲に立地している。また、本遺跡の北方約4～6kmには国史跡五所川原須恵器窯群（五所川原市）が分布し、同じく東方約3.5kmには中世の北畠氏が居城とした国史跡浪岡城跡が所在するなど、縄文時代を始めとして古代から中世にかけて数多くの遺跡が営まれ、たくさんの人々が生活していた様子をうかがい知ることができる。

浪岡地域では、前述したように丘陵東部・大沢迦川右岸に古代の集落が南北に連なるように形成されている。これらの遺跡群は、北から山本（1）遺跡、野尻（1）遺跡、野尻（4）遺跡、野尻（2）遺跡、野尻（3）遺跡、国史跡高屋敷館遺跡、山元（1）遺跡、山元（2）遺跡、山元（3）遺跡の9遺跡からなり、これまでに多数の集落が確認され、堅穴建物跡をはじめとする数多くの遺構が検出・精査されている。また、これらの古代集落の多くには現在の行政区境の尾根を越えた丘陵西部に所在する五所川原須恵器窯群から多量の須恵器が供給されていたことも、これまでの調査成果から判明している。段丘南端に位置する本遺跡はB-Tm（白頭山-苦小牧テフラ）降下前、10世紀前半に営まれた集落の一部と考えられ、堅穴・掘立柱建物・外周溝がセットになる特徴的な建物跡が検出されていることから、後述する同様な建物跡が見つかっている周辺遺跡とも密接な関係にあったことが推定される。10世紀後半以降になると本遺跡から南方3～4kmの地点を西流する浪岡川や十川沿いで沖積地やそれに接する微高地に営まれた大沼遺跡、宮元遺跡、水木館遺跡（旧常盤村：現藤崎町）が知られる他、北東方約2.5kmに位置する高屋敷館遺跡では土塁と環濠に囲まれた集落が形成されるなど、遺跡の立地や景観にも大きな変化が見られることとなる。

多くの遺跡が所在する浪岡地域にあって、樽沢村元地区をはじめとする段丘南部は、大規模な開発のあった丘陵東部に比べ発掘調査の手が入ることは少なかったが、平成10年代後半に入ると果樹園内の道路整備等に伴い、寺屋敷平遺跡・中平遺跡の2遺跡で相次いで発掘調査が行われている。寺屋敷平遺跡は本遺跡の北方約1.2kmに位置し、立地する標高は40m前後を測る。縄文時代の遺物が散漫に見られる他、平安時代の堅穴建物跡が10棟検出されるなど9世紀末～10世紀前半を中心とする比較的短期間に営まれた集落と考えられている。遺物では墨書・刻書が施される土師器・須恵器、ミニチュ

ア土器、土玉等が多く出土する特徴を持つ。中平遺跡は本遺跡とは熊沢溜池を挟み北西方約0.7kmに位置し、立地する標高は35～40mを測る。複合遺跡で、縄文時代の亀甲形の掘立柱建物跡や平安時代の集落が検出されている。縄文時代の遺物は早期から晩期まで見られ、中でも後期前葉、十腰内I式期に充実期がある。平安時代の堅穴建物跡は4ヶ年に渡る調査で9世紀前葉から10世紀後葉までの計77棟検出されており、掘立柱建物と外周溝が付随するものも多数見受けられる。

その後も周辺地域では、果樹園地内外の道路整備等に係る開発行為に伴い断続的に遺跡の発掘調査が行われている。上野遺跡は本遺跡の南西方約1kmに位置し、立地する標高は34m前後を測る。縄文時代中期の所産と考えられる掘立柱建物跡2棟の他、10世紀前半を主体とする平安時代の集落が検出され、堅穴建物跡21棟をはじめ土坑、溝跡、円形周溝などの遺構で構成される。出土遺物では東海産の綠釉陶器が注目される。また、江戸時代末期の絵図に描かれた街道の位置と重なる道路跡が現在の道路の下から検出され、江戸時代に整備され「下之切通り」と呼ばれた街道跡の可能性が高いとされている。下石川平野遺跡は本遺跡の北西方約2.3kmに位置し、立地する標高は30～48mを測る。比較的幅の広い農道拡幅部分と狹小な配水管部分の調査が行われている。縄文時代前～中期と平安時代の複合遺跡で、縄文時代では前期後半の堅穴建物跡とともに断面形状がフ拉斯コ形を主体とする土坑群や捨て場を含む遺物包含層、平安時代では9世紀後半から10世紀前半に盛期があった集落が検出されている。平安時代の集落は堅穴建物跡72棟、掘立柱建物跡8棟、土坑150基、溝跡78条などの遺構で構成される。熊沢溜池遺跡は本遺跡の南西方約0.7kmに位置し、立地する標高は34m前後を測る。縄文時代の遺物が散漫に見られた他、平安時代の集落が検出されている。平安時代の集落は堅穴建物跡25棟、掘立柱建物跡2棟、溝跡25条、堀跡2条などの遺構で構成され、堅穴に掘立柱建物と外周溝が付随する建物跡も検出されている。郷山前村元遺跡は本遺跡の南西方約1.4kmに位置し、立地する標高は34m前後を測る。縄文時代の遺物が散漫に見られた他、平安時代の集落が検出されている。平安時代の集落は円形周溝2基、溝跡16条、土坑2基で構成される。浪岡賀沢遺跡は本遺跡の西北西約1.4kmに位置し、立地する標高は25～35mを測る。縄文時代と平安時代の複合遺跡で、縄文時代では土器埋設遺構3基、フ拉斯コ状土坑40基、溝状土坑1基、平安時代では堅穴建物跡2棟、溝跡2条が検出されている。旭（1）遺跡は本遺跡の北西方約1kmに位置し、立地する標高は34～39mを測る。縄文時代の遺物の散布が見られる他、平安時代の集落が検出されている。平安時代の集落は堅穴建物跡13棟、土坑25基、溝跡7条などで構成され、口縁内面に刻書のある土師器甕、錫杖頭状土器製品、土玉、土鈴、石製玉などの遺物が注目される。旭（2）遺跡は本遺跡の北西方約1.5kmに位置し、立地する標高は38～39mを測る。縄文時代の遺物の散布が見られる他、平安時代の集落が検出されている。平安時代の集落は堅穴建物跡2棟、土坑3基、溝跡5条などで構成され、土師器・須恵器の他、土鈴や羽口などの遺物が出土している。堅穴建物跡1棟には外周溝が付随する。

以上、本遺跡を含む段丘南端にも数多くの遺跡が所在し、上述したように発掘調査が行われた事例も近年増えつつある。縄文時代や平安時代の遺跡が多く、本遺跡を含めた一帯は当時も暮らしやすい環境であったものと思われる。

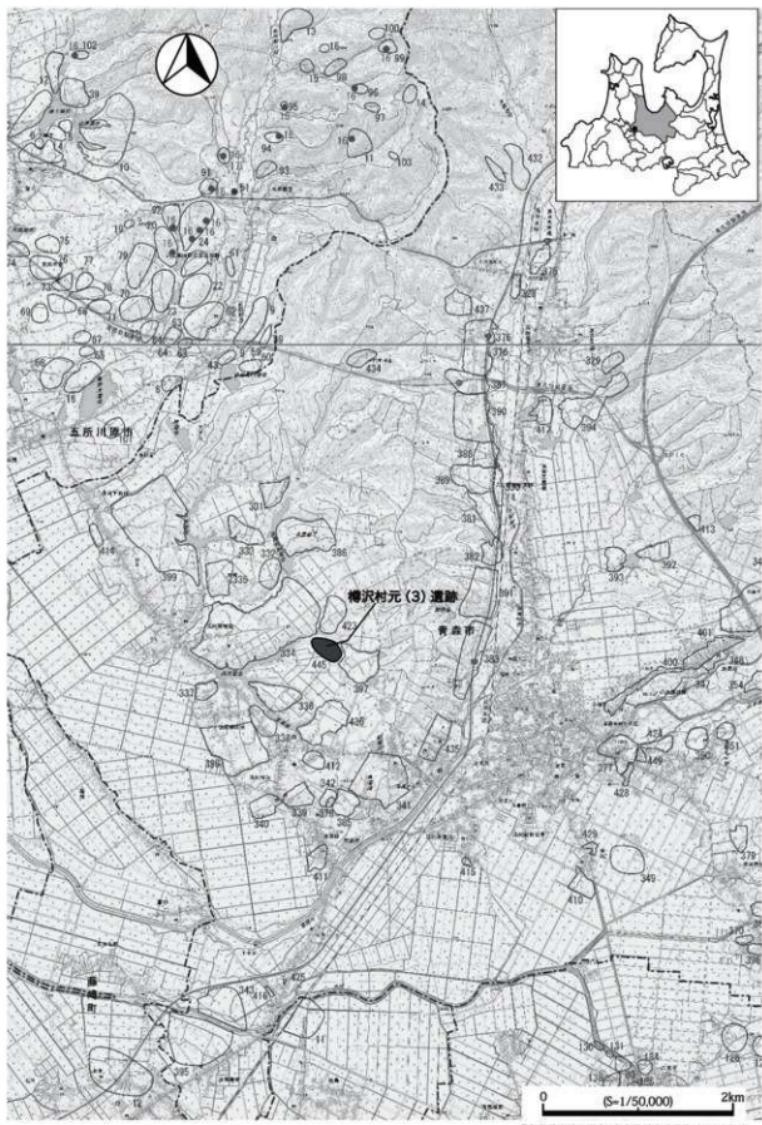


図1 遺跡位置図

表1 樽沢村元(3)遺跡と周辺の遺跡一覧

市町	遺跡番号	遺跡名	時代										種別	備考	起点からの直線距離(km)			
			圓文					評議不可	弥生	秦	平安	中世	近世					
			草	早	前	中	後											
	201330	高屋敷遺跡				○	○	○	○	○	○	○	○	散布地、集落	国史跡	2.5		
	201332	旭(1)遺跡	○	○	○									散布地、集落		1.0		
	201333	旭(2)遺跡				○	○							散布地、集落		1.5		
	201334	中平遺跡	○	○	○	○	○							散布地、集落		0.7		
	201335	浪岡震塗遺跡	○	○	○	○	○							散布地、集落		1.4		
	201336	鶴沢溜池遺跡	○			○								散布地、集落		0.7		
	201338	上野遺跡	○	○	○	○			○	○	○	○		散布地、集落、墓		1.0		
	201343	大沼遺跡								○				散布地		3.9		
	201347	浪岡城跡							○	○				城館	国史跡	3.5		
青森市	201376	山本(1)遺跡	○	○	○				○					散布地、集落		3.5		
	201381	山元(1)遺跡	○		○				○					散布地、集落		2.2		
	201382	山元(2)遺跡			○	○	○		○					散布地、集落		2.0		
	201383	山元(3)遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落		1.5		
	201386	寺守敷平遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落		1.2		
	201387	野尻(1)遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落		3.2		
	201388	野尻(2)遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落、墓		2.6		
	201389	野尻(3)遺跡	○	○	○	○	○		○	○	○	○		散布地、集落、墓		2.4		
	201390	野尻(4)遺跡	○	○	○	○	○		○	○	○	○		散布地、集落		2.9		
	201395	宮元遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落		4.3		
	201398	鷲山前村元遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落、墓		1.4		
	201399	下石川平野遺跡	○	○	○	○	○		○					散布地、集落		2.3		
	201445	樽沢村元(3)遺跡	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	散布地、集落	起点			
	205009	桜ヶ峰(1)遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	散布地、須恵器窯		3.5		
	205010	山道溜池遺跡							○					散布地、須恵器窯		5.9		
	205011	砂田B遺跡							○					須恵器窯	国史跡	5.4		
	205012	紅葉(1)遺跡							○					集落、須恵器窯		6.8		
	205013	砂田C遺跡							○					須恵器窯		6.3		
	205014	砂田D遺跡							○					須恵器窯		5.9		
	205015	野脇遺跡							○					須恵器窯		6.2		
	205016	砂田E遺跡							○					須恵器窯		6.4		
	205017	鶴ノ沢窯跡							○					須恵器窯	国史跡	5.3		
	205020	隠川(1)遺跡			○	○			○					散布地、須恵器窯	国史跡	4.6		
	205021	持子沢遺跡A遺跡							○					須恵器窯		4.3		
	205022	持子沢遺跡B遺跡							○					須恵器窯		4.0		
	205023	持子沢遺跡C遺跡							○					須恵器窯		4.2		
	205024	持子沢遺跡D遺跡							○					須恵器窯	国史跡	4.7		
五所川原市	205039	原子溜池(4)遺跡						○	○					散布地、須恵器窯		6.5		
	205070	隠川(10)遺跡						○	○					散布地、須恵器窯		4.1		
	205079	鏡無(7)遺跡						○	○					散布地、須恵器窯		4.5		
	205091	犬走(3)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	5.1		
	205092	隠川(13)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	4.9		
	205093	砂田F遺跡						○	○					須恵器窯		5.1		
	205094	砂田G遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	5.4		
	205095	前田野目山(1)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	5.8		
	205096	前田野目山(2)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	5.9		
	205097	前田野目山(3)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	5.8		
	205098	前田野目山(4)遺跡						○	○					須恵器窯		6.2		
	205099	前田野目山(5)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	6.4		
	205100	前田野目山(6)遺跡						○	○					須恵器窯		6.6		
	205101	広野遺跡						○	○					散布地、須恵器窯		3.3		
	205102	紅葉(2)遺跡						○	○					須恵器窯	国史跡	6.8		
	205103	砂田H遺跡						○	○					須恵器窯		5.3		
	361011	福島遺跡						○						散布地		3.8		
	361012	木水館遺跡						○						散布地、城館		5.0		

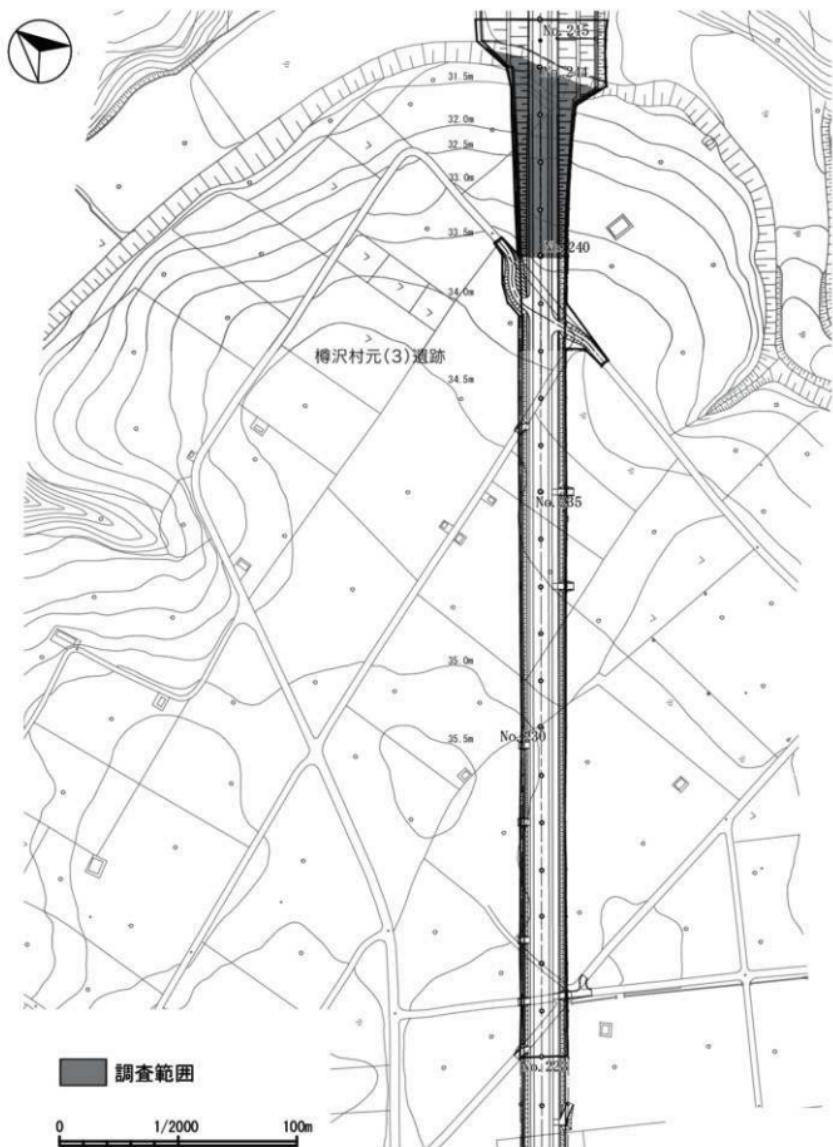


図2 路線図・調査範囲と遺跡周辺の現在の地形

第2節 遺跡周辺の地形及び地質

弘前大学大学院・理工学研究科

佐々木 実

1 位置及び地形・地質の概要

樽沢村元 (3) 遺跡は津軽半島南部、梵珠山地南端部と津軽平野の境界部に分布する台地上に位置する。遺跡周辺の地形図および地形段彩陰影図を図3 (a) および (b) にそれぞれ示す。遺跡周辺の標高は30～40mであり、周囲には台地を下刻する谷をせき止めた溜池(熊沢溜池、吉野田溜池など)が分布する。台地の東側は梵珠山地南端部の標高75～100mの尾根が南北に伸び、西側には標高20m未満の津軽平野が広がる。遺跡調査範囲は水野・堀田(1983)の地形分類図では「前田野目台地III c-G t II(中位)面」に分類されている。岩井ほか(1983)の表層地質図においては、「岡町層・前田野目層」の粘土・砂・疊からなる未固結堆積物が分布するとされている。5万分の1地質図幅「青森西部」(長森ほか, 2013)においては「高位段丘堆積物」が分布するとされている。長森ほか(2013)は、吾妻(1995)に基づき本堆積物により構成される段丘面の形成年代を酸素同位体ステージ7(22-20万年前)としている。

2 地質柱状図

樽沢村元 (3) 遺跡調査地域内の2地点において地層断面の観察を行い柱状図を作成した。結果を図4に示す。

①は暗褐色～淡褐色土壤で、層厚は地表から40～50cmである。基本層序の第I、第II、第III層に相当する。地点Bにおいては地表から30cmの位置にガラス質細粒火山灰の断片的な層が認められる。本火山灰は別に行われた火山灰分析により白頭山苦小牧テフラ(B-Tm)であることがわかっている(佐々木, 2023)。

②は淡黄灰色を呈する塊状の粗粒凝灰岩よりなる。基本層序第IV～VI層に相当する。層厚は65cm程度で、上位の土壤との境界は凹凸があり不規則に漸移する。一部に長さ3cmの木片が含まれる。

③は淡灰色を呈する塊状の細粒凝灰岩よりなり、層厚は10cmである。基本層序の第VII層に相当する。上位の粗粒凝灰岩との境界は明瞭であるが、浸食等の明瞭な時間間隙を示す証拠は認められない。

④は淡黄灰色を呈する塊状の粗粒凝灰岩からなる。粒径3mm程度の軽石粒子を含む。層厚は30cm以上である。基本層序の第VIII層に相当する。上位の粗粒凝灰岩との境界は明瞭であるが、浸食等の明瞭な時間間隙を示す証拠は認められない。

②～④は初生的な火碎堆積物ないしその2次堆積物と考えられるため、含まれる火山ガラスおよび鉱物の予察的な観察を行った。②は無色のバブル型ガラスと褐色ガラスを含み、鉱物として斜長石、普通輝石、直方輝石、磁鐵鉱を含む。③は無色のバブル型ガラスと褐色ガラスを含み、鉱物として斜長石、普通輝石、直方輝石、磁鐵鉱とごく微量の普通角閃石を含む。④はバブル型ガラスを含み、鉱物として斜長石、普通輝石、直方輝石、普通角閃石および磁鐵鉱を含む。

3 火山灰層の対比

④はバブル型火山ガラス、斜長石、直方輝石、普通輝石および普通角閃石を含むことから、十和田火山八戸火砕流堆積物 (Hayakawa, 1985; 工藤, 2019) に由来すると判断される。岩相から初生的な火砕流堆積物である可能性が高い。長森ほか (2013) も「高位段丘堆積物」が八戸火砕流堆積物に覆われるとしている。一方、①および②は層序と岩相からは③の八戸火砕流堆積物の2次堆積物である可能性が考えられる。しかしながら鉱物として斜長石、直方輝石、普通輝石を含むが普通角閃石はごく稀にしか含まれず、火山ガラスとして無色粒子の他に褐色の粒子を相当量含むという特徴をもつ。これらの特徴は十和田火山の後カルデラ期噴出物、特に十和田aテフラに類似するが (工藤, 2019), 上位の①中に白頭山苦小牧テフラが認められることから層序的に考えににくい。それ以前の十和田火山噴出物の内で可能性のあるものとしては十和田中振テフラが考えられるが、本地点付近には分布は知られていない (Hayakawa, 1985)。給源として可能性がある他の火山としては岩木火山、八甲田火山があるが、いずれも十和田八戸火砕流の堆積後に本地点付近に達するような火山噴出物は知られていない。①および②層に含まれる火山灰起源のガラス、鉱物の帰属は現時点では不明である。

引用文献

- 吾妻 崇 (1995) 変動地形からみた津軽半島の地形発達史, 第四紀研究, 34, 75-89.
- Hayakawa,Y. (1985) Pyroclastic Geology of Towada Volcano. *Bulletin of the Earthquake Research Institute University of Tokyo*, 60, 507-592.
- 岩井武彦・大久保貞・沢田庄一郎 (1983) 土地分類基本調査「青森西部」, 各論II 表層地質図, 青森県, 16-26.
- 工藤 崇 (2019) 十和田湖地域の地質, 第7章 十和田火山噴出物(中部更新統～完新統), 地域地質報告(5万分の1地質図幅), 産総研地質調査総合センター, 114-154.
- 水野 裕・堀田報誠 (1983) 土地分類基本調査「青森西部」, 各論I 地形分類図, 青森県, 11-15.
- 長森英明・宝田晋治・吾妻 崇 (2013) 青森西部地域の地質, 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅), 産総研地質調査総合センター, 67p.
- 佐々木実 (2023) 遺跡出土の火山灰, 青森県教育委員会 2023『樽沢村元(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第635集, 36-38.

(a)



(b)

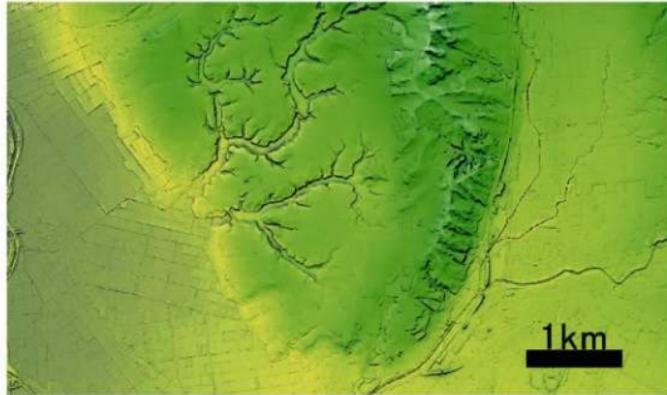


図3

(a) 樽沢村元(3) 遺跡周辺の地形図。

国土地理院「地理院地図」(<https://maps.gsi.go.jp/>) のデータから、「カシミール3D」(<http://www.kashmir3d.com/>) により作成。

(b) 周辺の地形段彩陰影図、「カシミール3D」(<http://www.kashmir3d.com/>) の「スーパー地形セット」により作成。地図の範囲は地形図と同一である。

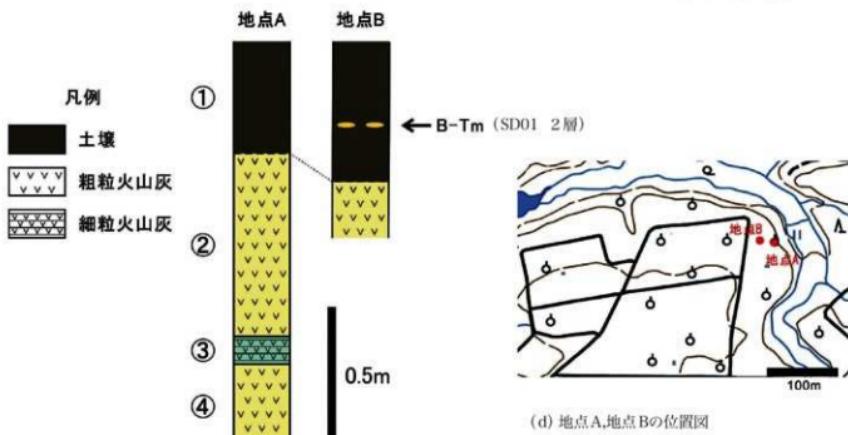


図4 (a) 地質柱状図

④は層厚30cm以上

岩相の詳細は本文に記載



(b) 地点A

折尺は全長1m



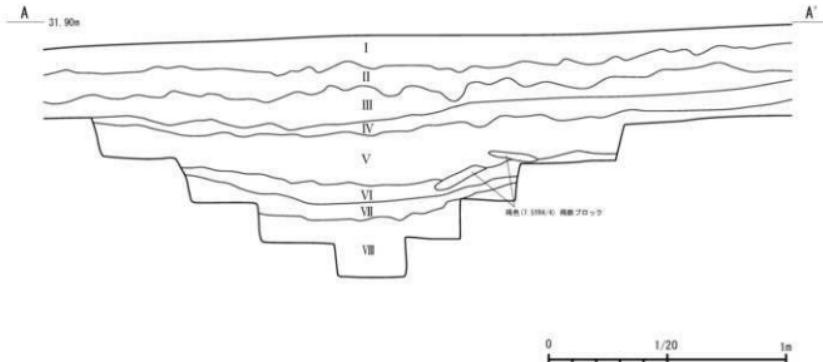
(c) 地点B

折尺は全長1m

第3節 基本層序

基本層序については調査区内のP・Q-13グリッドに土層観察用の深掘りを1箇所設置し、位置は図4(d)及び図6に示した。ここでは各層の層相についての記載を行う。

層序は上層から第I～VII層に区分した。今回の調査区は西から東に向い緩やかな傾斜を持ち、東端には小谷へと向かう比高差4m程の急な斜面が形成されている。



基本層序

- 第I層 黒褐色(10YR3/2) シルト 粘性無し しまり中弱 表土 調査区全域に20cm前後の層厚で堆積しており表層には厚さ数cmの草根層が発達
- 第II層 黒褐色(10YR2/2) 粘土質シルト 粘性中弱 しまり中弱 農耕により欠落する箇所も見受けられる
古代遺構の掘り込み面 掘出面(S001・03) 明黄褐色(10YR7/6)粒(φ0.5mm)1%
- 第III層 明黄褐色(10YR3/4) シルト質粘土 粘性中強 しまり中強 第IV層との漸移層で繩文時代の遺物包含層と考えられる
遺構の検出面、下部は黄褐色(10YR5/8)に近づく
- 第IV層 明黄褐色(10YR6/8) シルト質粘土 粘性中強 しまり中強 手曳層の上部
- 第V層 明黄褐色(10YR6/6) シルト質粘土 粘性中 しまり中弱 粒径5% 級に3~5mm含む 千支層の本体
- 第VI層 明黄褐色(10YR7/6) 極細粒砂質シルト 粘性中 しまり弱 千支層下部 第V層に砂が混じる 第VII層と第V層の漸移層
- 第VIII層 灰オーブー色(5Y6/2) 粘土 粘性強 しまり強 鐵鉄粒(3~5mm)8%
- 第VII層 灰黄色(2.5Y7/2) 稕細 粒砂混じり粘土 粘性強 しまり強 長さ5~10mmの鐵鉄10% 軽石含む

図5 基本層序

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 概要

樽沢村元（3）遺跡は、青森市役所浪岡庁舎の西方約2.5km、標高32m前後の段丘上に立地し、遺跡に至る道路や調査区からは果樹園越し西方に津軽富士と称される岩木山、東方には八甲田連峰を望むことができる。遺跡を含む一帯では、りんごやサクランボ、カシスといった果樹の栽培が盛んに行われている。今回の事業に係る調査区からは平安時代の竪穴建物跡1棟、溝跡3条、土坑1基、掘立柱建物跡を含む柱穴・ピット7基の遺構を検出し、縄文時代早~前期、後期の土器や石器、平安時代の土師器、須恵器、鉄滓、近世以降の陶磁器等の遺物が出土した。

以下に検出遺構と出土遺物の詳細を記述する。なお、第2号溝跡については底面に約2m間隔で丸太が打ち込まれており、りんごの矮化栽培に伴う痕跡であることが判明したため欠番とした。また、竪穴、柱穴・ピットについても精査中や整理作業の過程で植栽痕や木根等と判定したものは欠番とした。

第2節 検出遺構

1 第1号竪穴建物跡（S101）(図7・8・15・17)

【位置・確認】D-17 グリッド他に位置する。第III~IV層上面、標高約33mで確認した。

【平面形・規模】竪穴のおよそ1/2が北西調査区外に存在する。竪穴の規模は北東側と南西側で確認できた壁周溝で1辺約530cmを測る。周辺遺跡の類例から竪穴の平面形は隅丸方形を呈していたと考えられる。北東側と南西側には前述したように一部壁周溝を有し、南東隅で隅柱が1基（SP29）、推定南東壁際で壁柱穴を2基（SP01・SP05）確認した。平面形は3基全てほぼ円形を呈する。検出面での規模はSP29が直径24~30cm、深さ30cm、SP01が直径28~32cm、深さ37cm、SP05が直径35~38cm、深さ38cmを測る。壁周溝の規模は幅18~22cm、深さ5~12cmを測る。調査区際の断面観察から床には第II・III層をベースとし第IV層がブロックや粒状に混入した貼床が施されており、その厚さは3~5cmを測る。

【施設】掘立柱建物が竪穴の南東壁側に付随している。掘立柱建物を構成する柱穴は計8基（SP06~09、SP11、SP17~19）検出した。柱穴の平面形は円形や隅丸方形を呈し、検出面での規模は直径・長軸28~36cm、深さ14~48cmを測る。柱痕はSP06・SP08・SP11・SP17・SP19で確認した。柱の抜き取り痕は認められない。建物は桁行2間×梁行2間を呈する。桁行総長560~570cm、梁行総長490~500cmを測る。各柱穴間の距離はSP06・SP07間240cm、SP07・SP08間250cm、SP08・SP09間250cm、SP09・SP17間320cm、SP17・SP18間250cm、SP18・SP19間250cm、SP19・SP11間310cm、SP11・SP06間が250cmを測る。掘立柱建物の軸方位はN-33°-Wを測る。その他、竪穴壁周溝際から東西外側に外周溝が造られている。調査区外に存在する北側を含み竪穴を馬蹄形状に囲んでいたものと思われる。外周溝の規模は検出面で幅50~70cm、底面幅40~50cm、深さは25~30cmを測る。西側の外周溝Aの端部は上面幅が最大約90cmと、やや膨らむ特徴を持つ。掘方底面には不明瞭ではあるが掘削痕が見られる。

【カマド】周辺遺跡の事例や掘立柱建物の位置関係からカマドは竪穴南東壁に付隨していたものと考えられるが、後世の土地改変や耕作等により消失したものと思われ、カマド推定部からは、その構成要素で

ある焼土や粘土、煙道、また、土師器や須恵器、支脚といった遺物も確認することはできなかった。痕跡がないためカマド煙道の形態も不明であるが、半地下式であった可能性が高い。

〔堆積土〕貼床直上まで削平されており竪穴部の堆積土は不明。壁周溝は3層に分層でき、黒褐色土を主体とした人為堆積の様相を呈している。外周溝は6層に分層でき、黒褐色土を主体とした人為堆積の様相を呈している。分析は行っていないが外周溝A' 1層中に火山灰と思われる灰白色粒子を微量含んでいる。

〔出土遺物〕貼床内から土師器片が1点出土し図示した。図17-1は土師器甕の胴部片で、外面の剥落が著しい。また、掘立柱建物を構成するSPO9堆積土から縄文土器片が1点出土し図示した。図15-13は口縁～胴部片で、円形や横長長方形の沈線が施文される。十腰内I式の鉢と思われ、遺構が埋没する過程で周辺の包含層から混入したものと考えられる。

〔時期〕遺構の形態や貼床内の出土遺物から平安時代の竪穴建物跡と考えられる。

2 第1号溝跡 (SD01) (図9・15・17)

〔位置・確認〕J-11～Q-9・10グリッドにかけて位置する。第II～IV層上面、標高32.2～30.8mで確認した。

〔重複〕第3号溝跡と重複していた可能性が高い。推定交差部分が試掘トレンチと重なっていたこともあり明確な新旧関係は不明だが、第3号溝跡の掘方底面は第1号溝跡確認面より若干低くなると考えられ、土層A-A' 1層の状況を併せて考えれば本遺構が新しい可能性が高い。

〔平面形・規模〕検出した溝跡の全長は約30m。確認面の幅は73～95cm、底面幅45～76cm、深さは30～50cmを測り、横断面形は逆台形状や箱形を呈している。調査区際J-11グリッドを起点とし、西から東に向かい等高線に直交する緩やかな傾斜を持ち、M-11グリッド付近で北東方向に緩やかに屈曲、M-10グリッド付近でまた東方向に緩やかに屈曲し斜面方向に向かい、Q-9・10グリッド付近で欠失する。屈曲部の平面形態や規模は後述する第3号溝跡に近似している。遺構掘方底面には金属製の工具によると思われる無数の掘削痕を明瞭に残している。

〔堆積土〕堆積土は4層に分層できた。4層とした埋め戻し土を除き概ね自然堆積の様相を呈している。2層中には白頭山-苦小牧テフラ(第4章第1節参照)がレンズ状に堆積している。

〔出土遺物〕堆積土中から土師器片と縄文土器片が數点出土している。土師器片3点と縄文土器片2点を図示した。図17-1～3は全て土師器甕の胴部片で、器面はかなり摩耗している。調整が分かるものはヘラナデが施されている。図15-1は縄文土器の口縁部片で、口唇部に押圧施文を有する。図15-9は縄文土器の胴部片。いずれも遺構が埋没する過程で周辺の包含層から混入したものと思われる。

〔時期〕堆積土中の火山灰から、十和田テフラ降下後で白頭山-苦小牧テフラ降下前に造られ、同テフラ降下前には役目を終えた平安時代の溝跡と考えられる。本遺構の機能としては、その形状や走行方向から区画の可能性が考えられる。区画内で主体をなす他の遺構は、図2に示した地形や位置関係から本遺構の南西方に展開していた可能性が高い。

3 第3号溝跡 (SD03) (図10・17)

〔位置・確認〕H-20～M-11グリッドにかけて位置する。第II～IV層上面、標高32.6～32.2mで確認した。

〔重複〕第1号溝跡と重複していた可能性が高い。本遺構の掘削深度が比較的浅く、推定交差部分が試掘トレンチと重なっていたこともあり明確な新旧関係は不明だが、遺構確認面、及び第1号溝跡土層A-A'の状況から考えると本遺構が古い可能性が高い。また、第1号土坑と一部重複しているが、明確な新旧関係は不明。

〔平面形・規模〕検出した溝跡の全長は約41m。確認面の幅は62～100cm、底面幅54～80cm、深さは12～23cmを測り、横断面形は箱形を呈している。H-20グリッドに位置する植栽痕の北側で検出された掘削痕から始まり、I-17グリッド付近までは等高線に沿うように南から北に向かい緩やかな傾斜を持ち、I-16グリッド付近で等高線に対し斜交する。I-15グリッド付近で北東方向にやや屈曲、J-14グリッド付近で再び緩やかに北方向に屈曲し、その後K-13グリッド付近で上端と下端は掘削痕と共に一度消失する。上端・下端と共に消失した掘削痕はK-12グリッド付近から散漫に見え始め、L・M-11グリッド付近でまた多くなり、その北東方で消失する。屈曲部の平面形態は第1号溝跡に近似するが、その形状は反転している様子がうかがえる。前述したとおり遺構掘方底面には第1号溝跡同様、金属製の工具によると思われる掘削痕を明瞭に残している。

〔堆積土〕堆積土は8層に分層できた。全層に黄褐色や灰黄褐色ロームブロックを混入しており、人為堆積の様相を呈している。

〔出土遺物〕遺構検出面や堆積土中から土師器片が数点出土している。壺1点、甕2点を図示した。図17-5は土師器壺の口縁～体部で内面に黒色処理を施しミガキ痕も認められる。図17-6は土師器甕の胴部。図17-7も土師器甕の胴部だ。

〔時期〕出土遺物から平安時代の溝跡と考えられる。本遺構の機能としては、その形状や走行方向から区画の可能性が考えられる。区画内で主体をなす他の遺構は、図2に示した地形や位置関係から本遺構の西方に展開していた可能性が高い。

4 第4号溝跡 (SD04) (図11)

〔位置・確認〕G・H-20グリッドに位置する。第IV層上面、標高32.8mで確認した。

〔重複〕東端を植栽痕により壊されている。また、SP28と重複しているが新旧関係は不明。

〔平面形・規模〕検出した全長は約430cm。確認面の幅は120～148cm、底面幅86～116cm、深さは22～36cmを測る。横断面形は不整な逆台形状を呈している。底面は全体的に凹凸があり、東側では深さ14cm程のSP28と呼称したビットを検出した。

〔堆積土〕堆積土は7層に分層した。黒褐色土を主体とし自然堆積の様相を呈している。分析は行っていないが、2層中に火山灰と思われる不整形ブロックを含んでいる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期〕平安時代の溝跡と考えられ、堅穴に付随する外周溝の可能性もあるが、全長は比較的短く、機能等、詳細については不明である。

5 第1号土坑 (SK01) (図12)

〔位置・確認〕J・K-13グリッドに位置する。第IV層上面、標高32.3mで確認した。

〔重複〕第3号溝跡と重複しているが、明確な新旧関係は不明。

〔平面形・規模〕第3号溝跡との重複により短軸は不明確。平面形は小判形を呈するものと思われ、長軸187cm、推定短軸80cm、深さは最深で55cmを測る。長軸・短軸とも断面形はすり鉢状を呈している。

〔堆積土〕堆積土は7層に分層し、1層を除き人為堆積の様相を呈している。分析は行っていないが、1層中に火山灰と思われる灰白色粒子を微量含んでいる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期〕堆積土の状況から平安時代の所産と考えられるが、機能等については不明。第1号溝跡と同時期に造られた遺構の可能性も考えられる。

6 第1号掘立柱建物跡、柱穴・ビット (SB01、SP24・SP26・SP27) (図13・14・17)

〔位置・確認〕H-17・18及びI-17グリッドに位置する。柱穴・ビットは第IV層上面で7基検出した。全て第3号溝跡より西側から検出している。

〔平面形・規模〕平面形は円形や隅丸方形を呈し、検出面での規模は直径・長軸16～30cm、深さは16～84cmを測る。柱穴・ビット7基のうちSP21・SP22・SP23・SP25の4基で第1号掘立柱建物跡(SB01)を構成する。桁行1間、梁行1間を呈する。各柱穴間の距離はSP21・SP22間225cm、SP22・SP23間145cm、SP23・SP25間220cm、SP25・SP21間165cmを測る。軸方位はN-35°-Wを測る。第1号竪穴建物跡に付随する掘立柱建物の軸方位と概ね一致しており、何らかの関連が推定される。

〔堆積土〕堆積土は2～3層に分層できた。SP21・SP26・SP27の1層は柱痕、2層は裏込めの可能性がある。

〔出土遺物〕SP25の検出面から土師器片が1点出土し図示した。図17-8は土師器甕の胸部片で器厚是比较的薄い。

〔時期〕SP24・SP26・SP27の堆積土中から遺物は出土していないが、第1号掘立柱建物跡を構成する柱穴・ビット検出面からの出土遺物、及び柱穴の形状や検出状況から帰属は全て平安時代と考えられる。

第3節 出土遺物

1 繩文土器(図15)

出土した縄文土器片は15点(198.1g)で、15点全て図示した。概ね縄文時代早～前期と後期に属するものと考えられる。平安時代の遺構からの3点(図15-1・9・13)を除いた12点が遺構外から出土している。図15-2・3は口縁部片。LR斜縄文が横回転で施文され、口唇部には同一原体を押圧施文している。早期後葉の赤御堂式に比定される。2・3は別個体と思われ、2は海面骨針を、3は繊維をそれぞれ胎土に含んでいる。図15-4～6は胸部片。LR斜縄文が横回転で施文される。早期後葉の赤御堂式に比定される。4は胎土に繊維を含んでいる。図15-7・8は底部に近い胸部片。LR斜縄文が縱回転で施文される。底部は尖底を呈していたものと思われる。早期末から前期初頭の土器片と思われ、胎土には長石粒が多く含んでいる。図15-10・11は胸部片で、早期末から前期初頭の土器片と思われる。図15-12は胸部片で、内面は丁寧に磨かれ、胎土に長石粒と繊維を含んでいる。前期初頭の土器片と思われる。図15-14は頸～胸部片と思われる。残存頸部付近に1条、その下に3条1単位の横位沈線と数条単位の縦位沈線が施されている。図15-15は胸部片で、2条の横位沈線が施されている。2点共、後期前葉の十腰内I式に比定される。

2 石器(図16)

剥片石器が2点(23.8g)出土し図示した。図16-1・2は剥片。2は一部に自然面を残している。石材は2点共に珪質頁岩。礫石器は2点(566.6g)出土し図示した。図16-3は磨石。扁平礫の側面1面を磨面として使用している。石材は安山岩。図16-4は三角柱状磨石。片端を欠損しているが三角柱状礫の3稜線を磨面として使用している。石材は安山岩。

3 土師器・須恵器(図17~19)

出土した総数は土師器片が28点(308.2g)、須恵器片が4点(45.0g)である。土師器片27点、須恵器片は4点全て図示した。遺構内からは前述のとおり土師器片が8点(図17-1~8)出土している。図17-9・10は土師器壺の口縁部片。内外面にロクロ調整痕が明瞭に見られる。10の口縁はやや外反気味に開く。図17-11は土師器壺の体～底部片。内外面にロクロ調整痕が見られる。底部調整は不明瞭だが、わずかに糸切り痕が見られる。図17-12～15は土師器壺。12は口縁部片、13は頸部片と思われる。14・15は胴部片で共に外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整が施される。14の外面には黒色に変色した部分が見られる。図18-1は土師器壺の体部片で、屈曲が見られる。図18-2～10は土師器壺の胴部片。器厚にはばらつきが見られ、複数個体の土師器壺が存在したものと思われる。図18-11・12は土師器壺の胴～底部片。11の器厚は比較的薄く、底部には圧痕が見られる。12も残存する胴部の器厚は薄く、底部には糸切り痕が見られる。

図19-1・2は須恵器壺の口縁部片。1・2共、内外面にロクロ調整痕が見られる。2の外面には2本の火襷痕が認められる。胎土分析は行っていないが、器表面の観察から2点共、五所川原窯産の可能性が高いものと思われる。図19-3は須恵器壺の肩部片と思われる。内面には當て具痕、外面には格子叩き目が顕著に認められ自然釉が薄く付着する。図19-4は須恵器壺の胴部片。器厚は薄く比較的小型の壺と思われる。外面には叩き目と自然釉が顕著に認められる。2点共、胎土分析は行っていないが、器表面や断面の観察から、五所川原窯産の可能性が高いものと思われる。

4 鉄滓(図19)

鉄滓が1点(56.0g)出土し図示した。図19-5は楕円鍛冶滓で欠損している。断面観察から明確な重なりは確認できない。磁着度は6を示し、メタル度4～5の結果が得られた。

5 陶磁器(図19)

陶磁器は5点(13.5g)出土し、うち4点図示した。第1層や搅乱からの出土がほとんどである。図19-6は口縁～体部片。肥前系染付磁器碗と思われる。外面に二重網目文様、内面には一重網目文様が描かれている。図19-7は体部片。肥前系染付磁器碗と思われ、外面には草花文様が描かれている。

図19-8も体部片。肥前系染付磁器碗と思われ、外面には草花文様が描かれている。図19-9は陶器碗の体部片。瀬戸美濃系と思われるが詳細については不明。

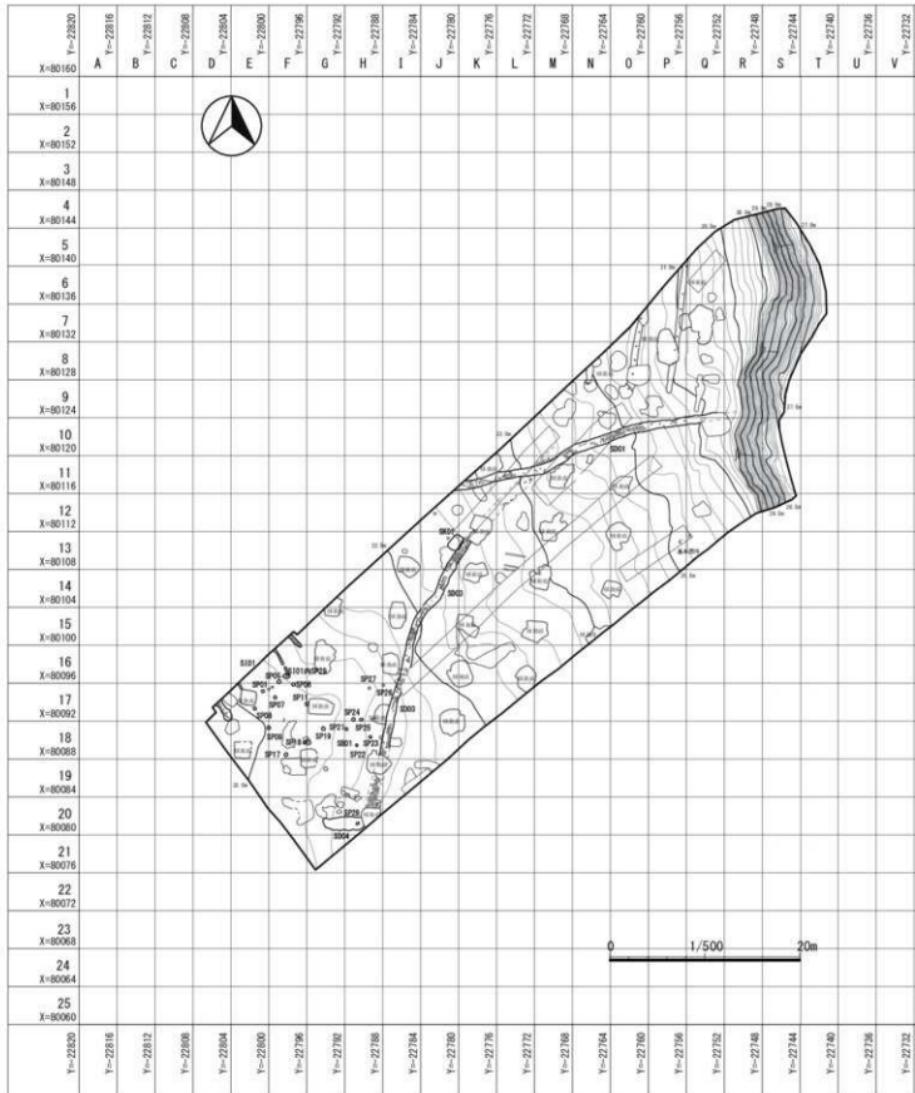


図6 グリッド及び遺構配置図

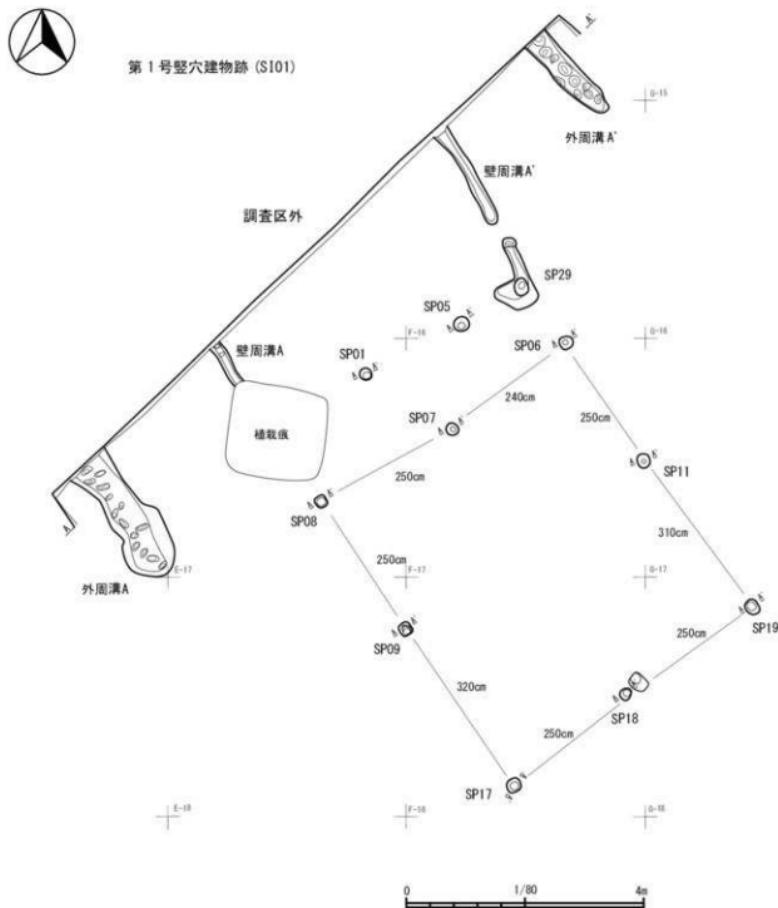


図7 第1号竪穴建物跡（1）



第1号溝跡(SD01)

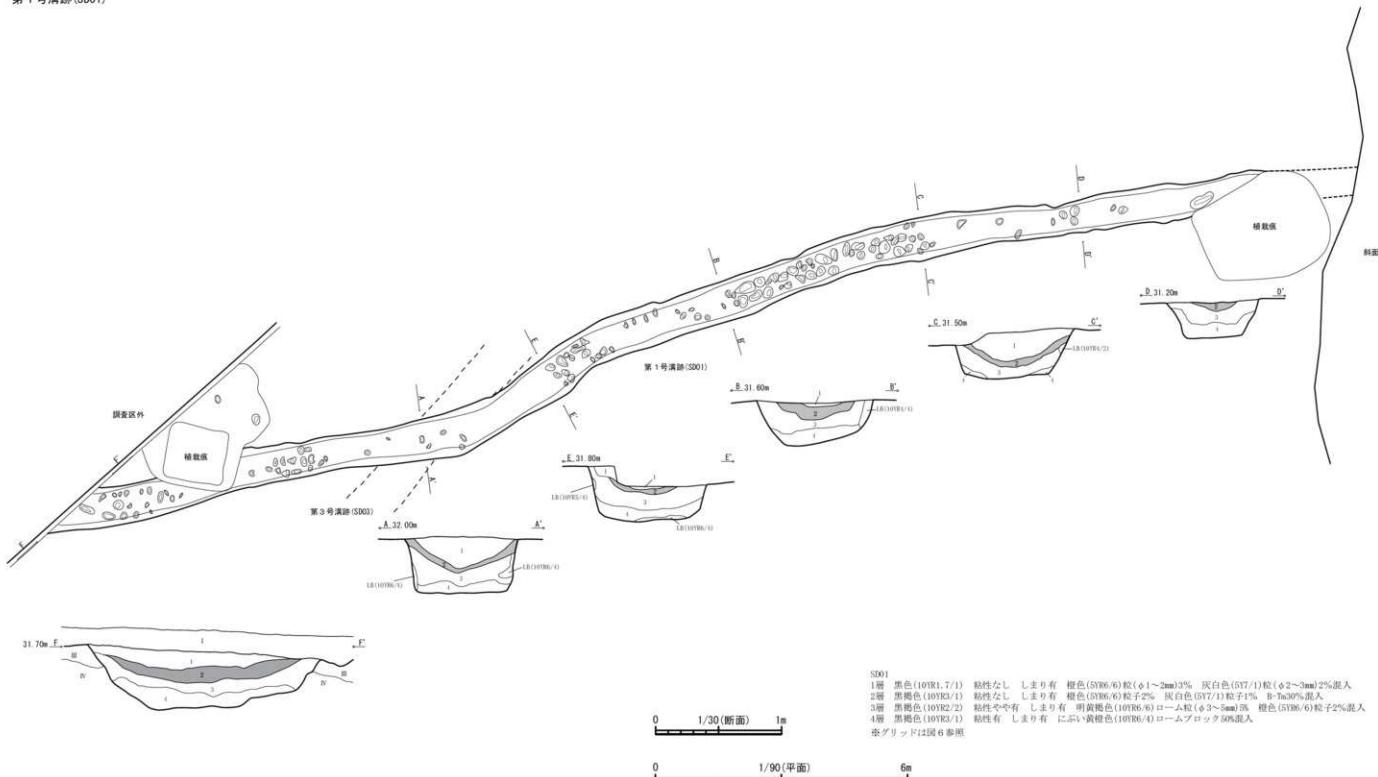
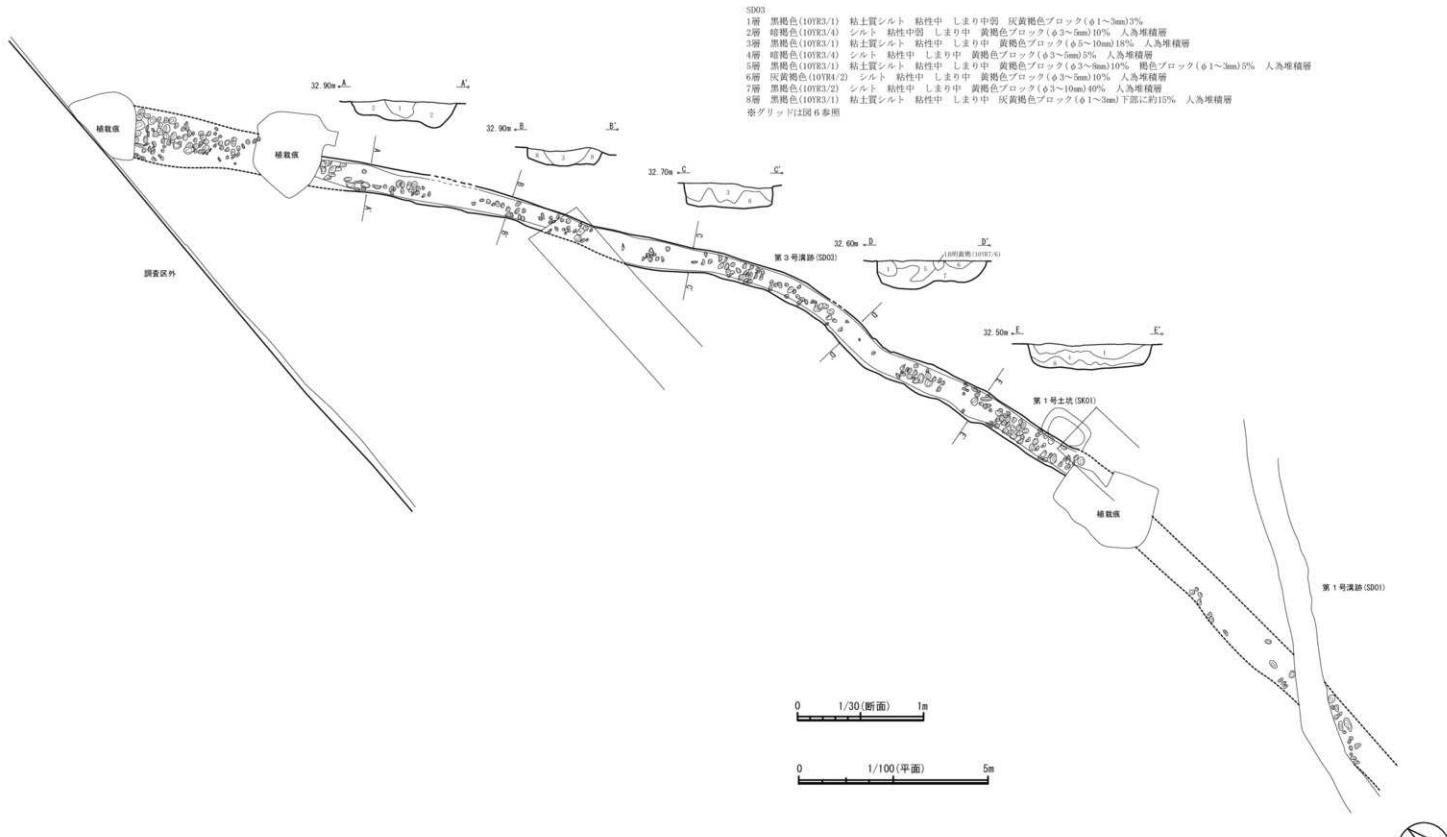


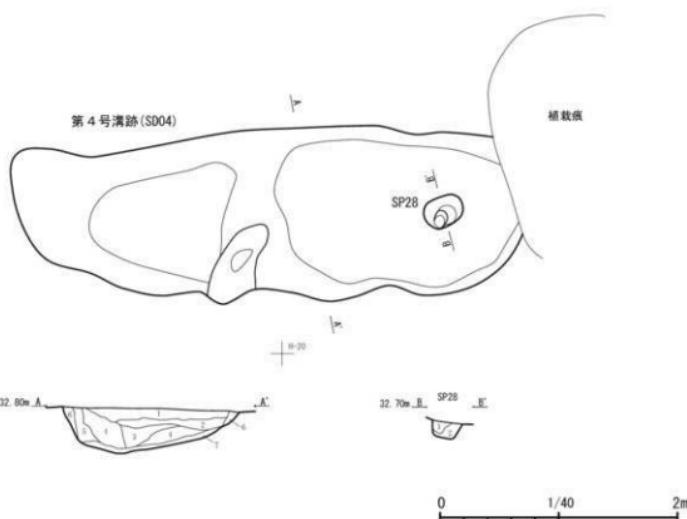
図9 第1号溝跡

第3号溝跡(SD03)





第4号溝跡(SD04)



SD04

- 1層 黒褐色(10YR2/2) シルト 粘性なし しまり弱 赤褐色粒(2.5YR4/6)(φ 1mm)1% 木根貫入有り
 2層 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土 粘性中弱 しまり中弱 B-Tmと思われるブロック(30×100mm)褐色(10YR4/4)(φ 10mm)の不整形ブロック混入
 3層 黒褐色(10YR3/2) シルト質粘土 粘性中 しまり中
 4層 黑褐色(10YR3/1) シルト質粘土 粘性中 しまり中 赤褐色粒(φ 1mm)1%混入
 5層 黑褐色(10YR3/2) 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黑褐色土(10YR3/1)(φ 5~10mm)10%混入
 6層 黑褐色(10YR3/2) 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黑褐色ブロック(10YR6/8)(φ 1~2mm)10%混入
 7層 黑褐色(10YR3/2) シルト質粘土 粘性中強 しまり強 黄褐色粒(φ 1mm)3% 黄褐色粒(φ 1mm)1%混入

SP28

- 1層 黒色(10YR2/1) シルト質粘土 粘性中 しまり中
 2層 黒色(10YR2/1) シルト質粘土 粘性中 しまり中 黄褐色(10YR5/8)ブロック(φ 10~15mm)15%混入 SD04の底面の凹凸の1つの可能性有り

図11 第4号溝跡



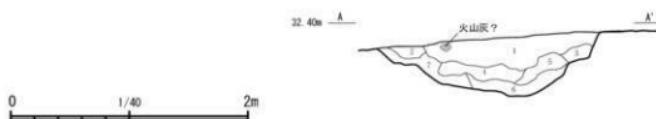
第1号土坑(SK01)

E-12

第1号土坑(SK01)

第3号溝跡(SD03)

E-13



SK01

- 1層 黒褐色(10YR3/1) 粘性有 しまり有 にぶい黄橙色(10YR7/4)粒子2%、灰白色(SYT/1)粒子ブロック状に1%混入
 2層 黒褐色(10YR2/2) 粘性有 しまり有 にぶい黄橙色(10YR7/4)粒(φ1~2mm)10%混入
 3層 鵝色(10YR4/4) 同色ローム主体 粘性やや有 しまり有
 4層 布褐褐色(10YR3/3) 粘性有 しまり有 にぶい黄橙色(10YR7/4)ロームブロック(1~2cm)20%混入
 5層 黒褐色(10YR3/1) 粘性有 しまり有 にぶい黄橙色(10YR7/4)粒子(φ1~2mm)2%混入
 6層 黄褐色(10YR5/6) 同色ローム主体
 7層 黄褐色(10YR5/6) 同色ローム主体

図12 第1号土坑

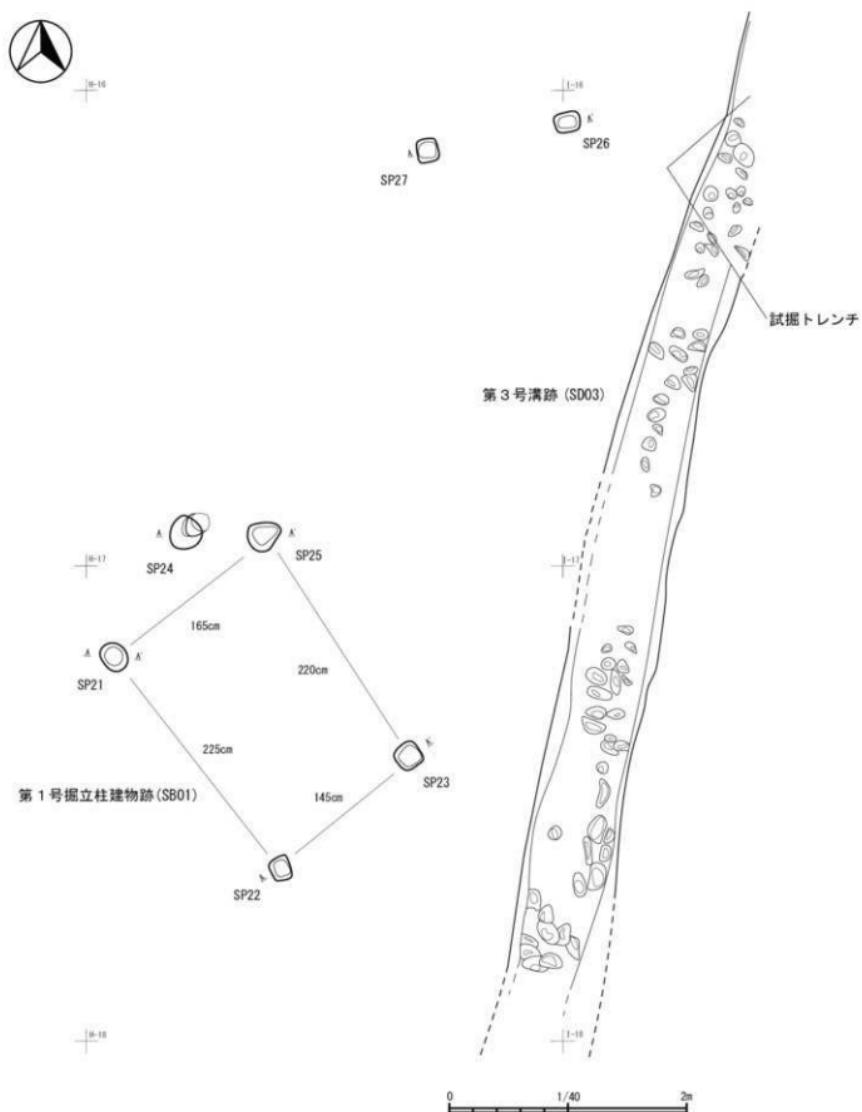
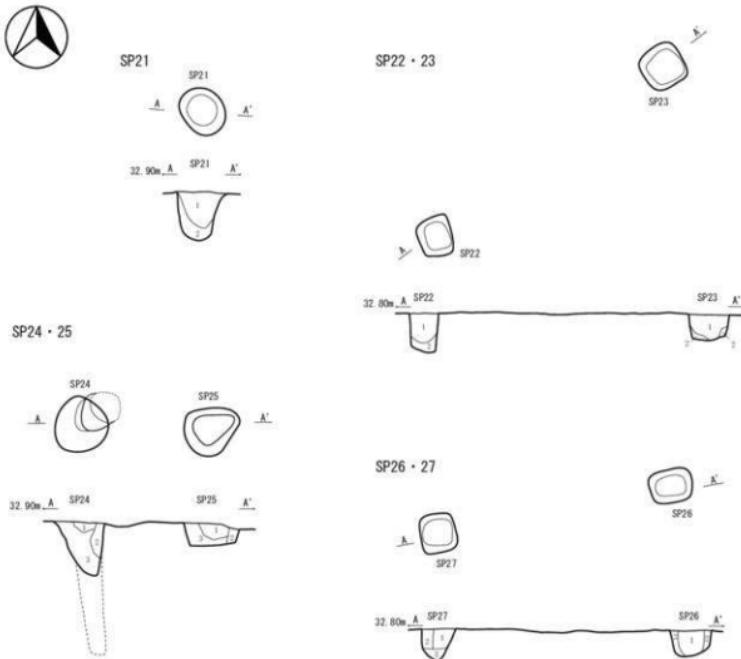


図13 第1号掘立柱建物跡、柱穴・ピット（1）



参考グリッドは図13参照

SP21

1層 黒褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黄褐色ブロック(φ1~4mm)8%混入
2層 黒褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黄褐色ブロック(φ1~3mm)15%混入
※1層 柱窓か
※2層 裏込めか

SP22

1層 黒褐色(10YR3/1) 粘性有 しまり有 にぶい黄褐色(10YR6/4)ローム粒(φ1~2mm)2%混入
2層 黑褐色(10YR2/2) 粘性有 しまり有 黄褐色(10YR6/6)ローム粒(φ3~5mm)1%混入

SP23

1層 黒褐色(10YR3/2) 粘性有 しまり有 黄褐色(10YR5/6)ローム粒(φ2~3mm)5%混入
2層 にぶい黄褐色土主体(10YR6/4) 粘性有 しまり有

SP24

1層 黒褐色(10YR2/2) 粘性有 しまり有 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒(φ2~3mm)2%混入
2層 黑褐色(10YR3/2) 粘性有 しまり有 黄褐色(10YR5/6)ロームブロック(2~5cm)2%混入
3層 黑褐色(10YR2/3) 粘性有 しまり有 明黄褐色(10YR6/6)ローム粒(φ2~3mm)10%混入

SP25

1層 暗褐色(10YR3/3) 粘性有 しまり有 にぶい黄褐色(10YR6/4)ローム粒(φ2~3mm)2%混入
2層 黑褐色(10YR3/2) 粘性有 しまり有 明黄褐色(10YR6/6)ロームブロック(2~3cm)10%混入
3層 明黄褐色土主体(10YR6/8) 粘性有 しまり有

SP26

1層 黑褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黄褐色ブロック(φ1mm)3%混入
2層 黑褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中 しまり中 黄褐色ブロック(φ1~3mm)15%混入
※1層 柱窓か
※2層 裏込めか

SP27

1層 黑褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中弱 しまり中弱 黄褐色ブロック(φ3~5mm)8%混入
2層 黑褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中 しまり弱 黄褐色ブロック(φ1~3mm)15%混入
3層 黑褐色(10YR3/1) 粘土質シルト 粘性中 しまり強 黄褐色ブロック(φ2~3mm)10%混入
※1層 柱窓か
※2層 裏込めか

図14 第1号掘立柱建物跡・柱穴・ピット(2)

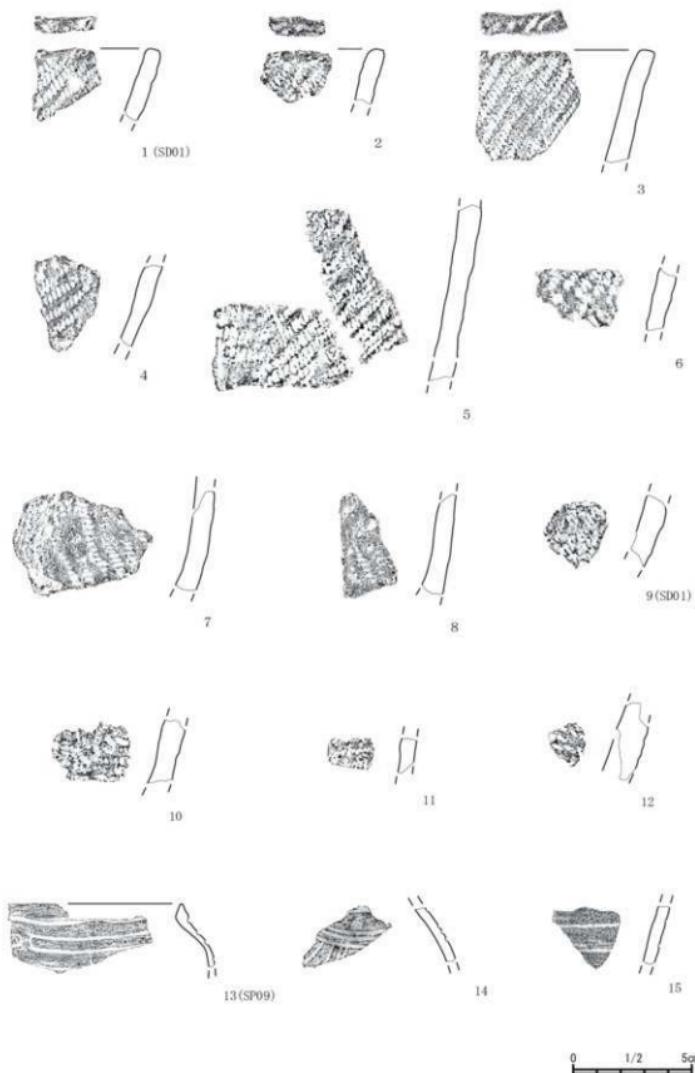


図15 出土遺物（縄文土器）

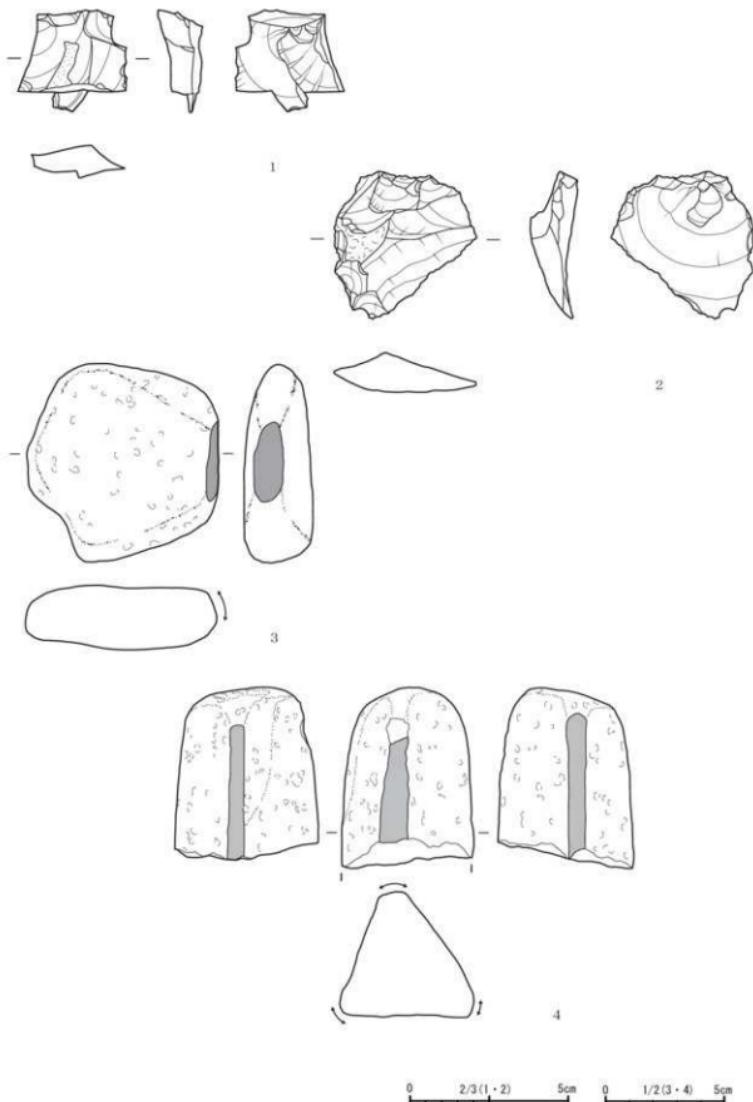


図16 出土遺物(石器)

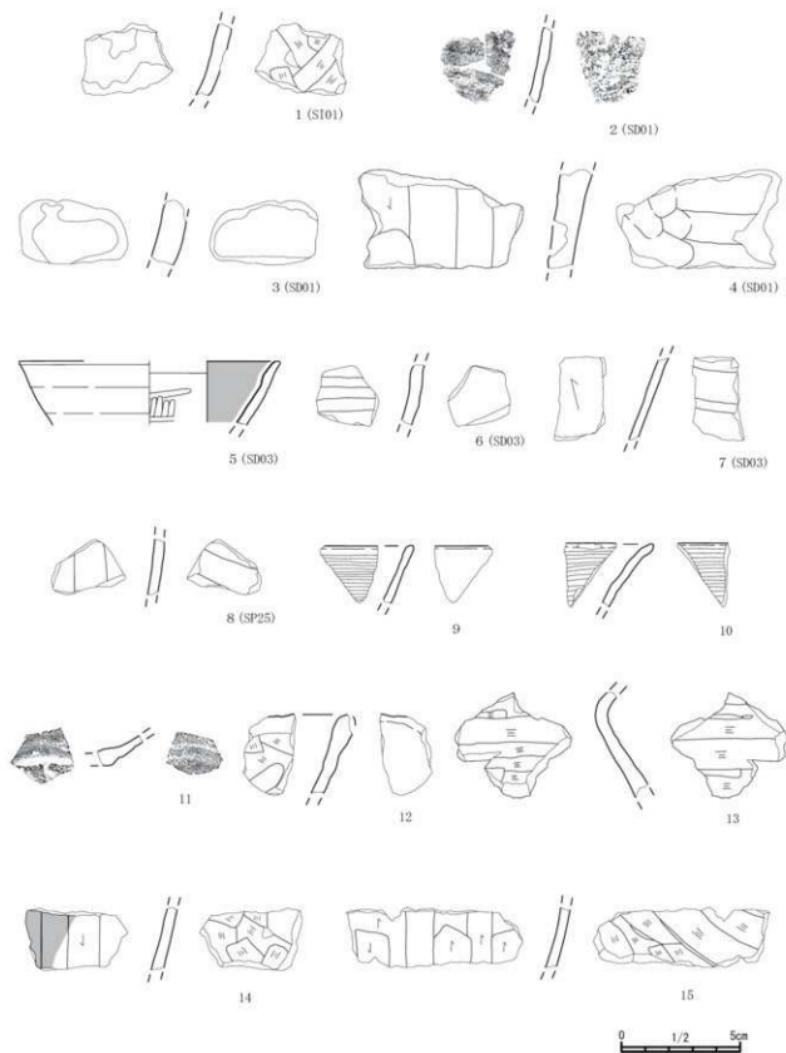


図17 出土遺物（土師器1）

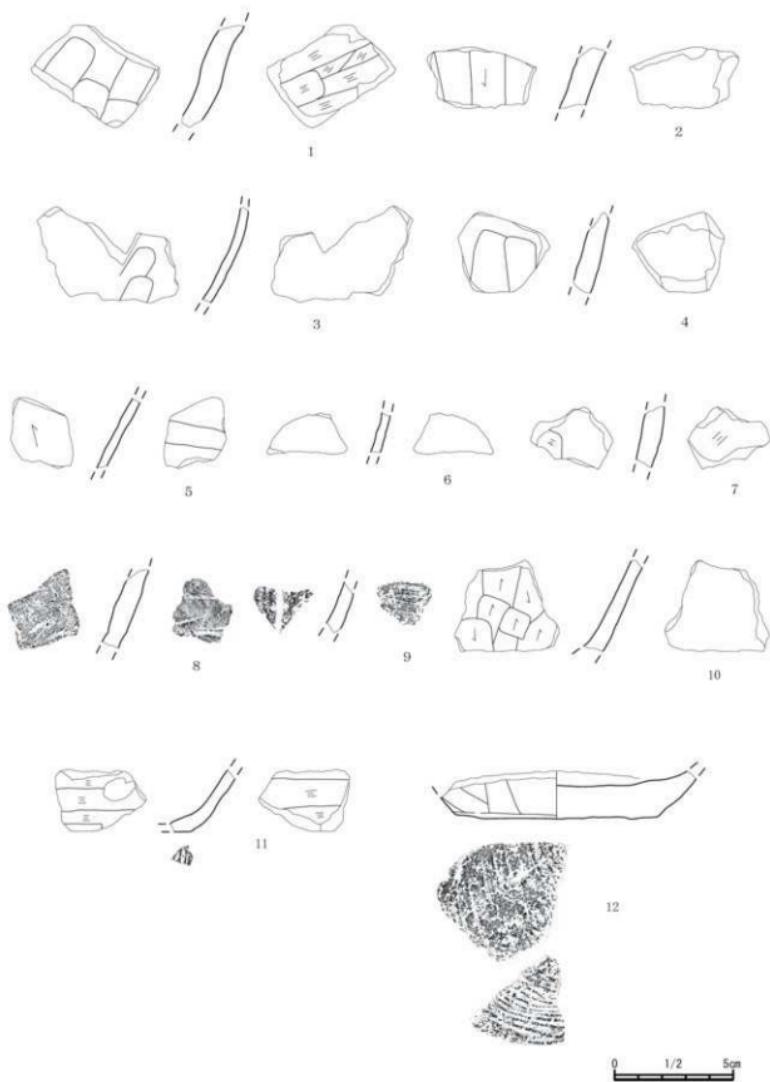


図18 出土遺物(土師器2)

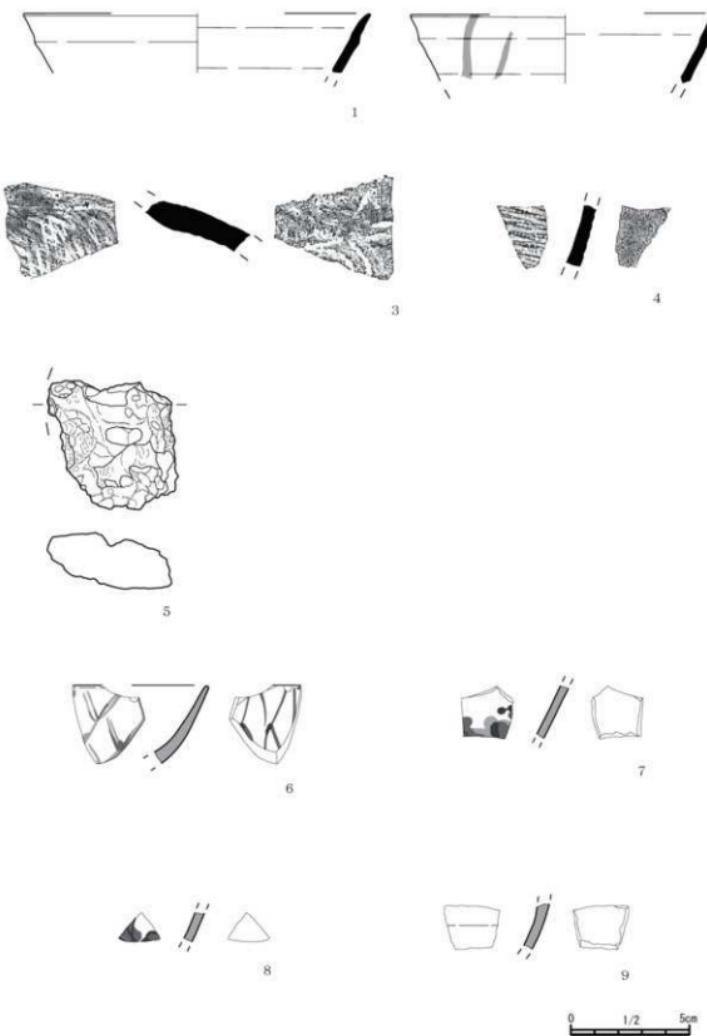


図19 出土遺物（須恵器・鉄滓・陶磁器）

第4章 自然科学分析

第1節 遺跡出土の火山灰

弘前大学大学院・理工学研究科

佐々木 実

1 試料

分析を行った試料は、表1に示す1試料である。

2 分析方法および分析結果

上記火山灰について、以下の分析を行った。

提供された試料は、約10 gを分取し、超音波洗浄機を用いて繰り返し水洗を行い含まれる粘土鉱物等の粒径数マイクロメーター以下の粒子を除去した後、乾燥した。得られた粒子から目開き250 μmのふるいを通してものを紫外線硬化樹脂により封止しスミアスライドを作成した。これを偏光顕微鏡により観察し、火山ガラスの形態、構成鉱物の種類を記載した。分析結果を表2に示す。またスミアスライドの偏光顕微鏡写真を図1に示す。

3 火山灰の帰属

火山灰1は、第1号溝跡(SD01)2層から出土した火山灰であり、白頭山-苦小牧テフラと予想されている。

白頭山-苦小牧テフラ(B-Tm)は、中華人民共和国および朝鮮民主主義人民共和国の国境に位置する白頭山(長白山)の10世紀の噴火によって生じたテフラであり、軽石型およびバブル型の無色火山ガラス、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含む(町田・新井, 2003)。本テフラの噴出年代は、AD946年の冬とされている(早川・小山, 1998; Oppenheimer et al., 2017; Hakozaki et al., 2018)。

表2に示すように、火山灰1は主としてバブル型の無色火山ガラス(粒径50 μm程度)からなり、アルカリ長石およびエジリンオージャイトを含むことにより、白頭山-苦小牧テフラに帰属される。無色鉱物として斜長石、有色鉱物として微量の直方輝石・普通輝石および普通角閃石粒子が認められるが、これらは粒径100 μm前後と火山ガラス粒子よりも粗粒であり、2次的に混入したものと推定される。

引用文献

- Hakozaki, M., Miyake, F., Nakamura, T., Kimura, K., Masuda, K., & Okuno, M. (2018) Verification of the Annual Dating of the 10th Century Baitoushan Volcano Eruption Based on an AD 774–775 Radiocarbon Spike. *Radiocarbon*, 60, 261–268.
- 早川由紀夫・小山真人 (1998) 日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日
—十和田湖と白頭山—. 火山, 43, 403–407.
- 町田 洋・新井房夫 (2003) ,新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会, 336p.
- Oppenheimer, C., L. Wacker, J. Xu, J.D. Galván, M. Stoffel, S. Guillet, C. Corona, M. Sigl, N. Di Cosmo, I. Hajdas, B. Pan, R. Breuker, L. Schneider, J. Esper, J. Fei, J.O.S. Hammond, U. Büntgen (2017) Multi-proxy dating the ‘Millennium eruption’ of changbaishan to late 946 CE. *Quat. Sci. Rev.*, 158, 164–171.

表 1 樽沢村元 (3) 遺跡 火山灰サンプル

分析番号	遺構	層位	分析に使用した重量(g)	洗浄後重量(g)
1	SD01	2	10.2	0.5

表 2 樽沢村元 (3) 遺跡 火山灰記載

分析番号	火山ガラス										鉱物	帰属
	bw	pm	br	pl	af	qz	opx	aug	ag-aug	ho		
1	○	+	+	+	○	-	+	+	+	+	+	B-Tm

○:含まれる; +:微量に含まれる; -:含まれない

bw: バブル型ガラス, pm: 軽石型ガラス, br: 褐色ガラス, pl: 斜長石, af: アルカリ長石, qz: 石英, opx: 直方輝石, aug: 普通輝石, ag-aug: エジリンオージャイト, ho: 普通角閃石, opq: 不透明鉱物
B-Tm: 白頭山苔小牧テフラ



図 1 火山灰試料の偏光顕微鏡写真。下方ポーラのみ（オープンニコル）。

右下スケールの長さは 200 μm。記号は表 2 と同じ。

第5章 総括

第1節 平安時代の遺構

今回の調査では平安時代の竪穴建物跡1棟、溝跡3条、土坑1基、掘立柱建物跡1棟等の遺構を検出した。竪穴建物跡は付随施設を伴う特徴を持っている。

1 掘立柱建物と外周溝が付隨する竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡は、竪穴に掘立柱建物と竪穴を囲む外周溝が付隨している。周辺遺跡では下石川平野遺跡で1棟（農道30号第9号竪穴建物跡）、熊沢溜池遺跡で2棟（第15号竪穴建物跡・第18号竪穴建物跡）、中平遺跡では16棟（記載は※1に記す）の掘立柱建物と竪穴を囲む外周溝が付隨する建物跡が確認されている。

竪穴に掘立柱建物が付隨する建物跡は下石川平野遺跡で6棟（農道23号第3号a竪穴住居跡・農道30号第8号竪穴建物跡・農道31号第2号a竪穴建物跡・農道31号第13号a竪穴建物跡・農道31号第13号b竪穴建物跡・農道31号第13号c竪穴建物跡）、上野遺跡で1棟（第21号竪穴建物跡）、熊沢溜池遺跡で5棟（第1号竪穴建物跡・第17号竪穴建物跡・第19号竪穴建物跡・第21号竪穴建物跡・第22号竪穴建物跡）、中平遺跡では9棟（農道27号第1号建物跡・農道25号第4号建物跡・農道10号第4号建物跡（新）・農道10号第5号建物跡・農道10号第7号建物跡・農道6号第2号竪穴住居跡（ピット列）・農道30号第1号建物跡・農道27号第2号建物跡・農道10号第2号a建物跡（古））確認されている。

竪穴に外周溝が付隨する建物跡は下石川平野遺跡で6棟（農道24号E区第1号竪穴住居跡・農道24号E区第2号竪穴住居跡・農道30号第7号竪穴建物跡・農道31号第22号竪穴建物跡・農道31号第24号竪穴建物跡・農道31号第26号竪穴建物跡）、旭（2）遺跡で1棟（農道37号第1号竪穴建物跡）、寺屋敷平遺跡で2棟（第4号竪穴住居跡・第10号竪穴住居跡）、熊沢溜池遺跡で3棟（第8号竪穴建物跡・第23号竪穴建物跡・第26号竪穴建物跡）、中平遺跡では5棟（農道29号第3号建物跡・農道8号第1号建物跡（古）・農道8号第1号建物跡（新）・農道2号第2号建物跡（古）・農道2号第2号建物跡（新））確認されている。

本遺跡から各遺跡までの直線距離は表1の通り、下石川平野遺跡が2.3km、旭（2）遺跡が1.5km、寺屋敷平遺跡が1.2km、上野遺跡が1.0km、熊沢溜池遺跡が0.7km、中平遺跡が0.7kmと、それほど離れている訳でもなく、その他の遺跡間の距離も数kmから数百m程度である。特徴的な構造の竪穴建物跡でも重複例が確認できる。中平遺跡では竪穴に掘立柱建物が付隨する建物跡（農道10号第7号建物跡）が、竪穴に掘立柱建物と外周溝が付隨する建物跡（農道10号第6号建物跡）よりも古いという結果が得られている。竪穴建物跡も同じ遺跡内での消長や変遷を行いつつ、本遺跡を含めた周辺遺跡とも互いに関係性を持ちながら人々と共に存在していた可能性が高い。今後、10世紀前半に降下した2つの火山灰が広範囲に及ぼした影響、出土遺物から見える各遺跡間の相違点や類似点を詳細に比較検討することにより浪岡地域の平安時代の様相が、より明らかになってくるものと思われる。

2 屈曲部を有する溝跡

第1号溝跡と第3号溝跡では、共に2箇所の屈曲部が確認されている。屈曲部と屈曲部の間が2m程

の直線となっている特徴も2遺構に共通する。第1号溝跡は東西軸を、第3号溝跡は南北軸を基調として造られており、区画する区域には違いがあったものと思われるが、屈曲部の形態や規模は概ね一致している。直線部分は2遺構共、北西～南東方向に対し直交するように造られている特徴も似ている。溝が両方向から掘られた結果、合流付近で屈曲が生じたとも考えられるが、何らかの機能を有していた可能性も否定できない。

3 挖方底面に工具による掘削痕を有する遺構

第1号溝跡と第3号溝跡の掘方底面から金属工具によるとと思われる掘削痕が多数検出された。掘削痕の形状は三日月状や半円状を呈し、弧の向きの検出状況からは掘削方向が推定できる。また、第1号溝跡では埋没過程での降下火山灰の堆積状況が確認でき、廃絶時期が推定できる。

掘方底面に掘削痕を有する遺構が検出された周辺遺跡とその種別を以下に示す。

- 野尻（1）遺跡第306号建物跡外周溝掘方底面（掘削痕の形状：三日月状。埋没過程で白頭山-苦小牧テフラが堆積。）
 - 中平遺跡農道6号第5号竪穴住居跡掘方底面（掘削痕の形状：半円状、三日月状で半円状が多数を占める※2。）
 - 下石川平野遺跡農道27号第7号溝跡掘方底面（掘削痕の形状：三日月状。埋没過程で白頭山-苦小牧テフラが堆積。第8号溝跡と重複し、第7号溝跡が新しい。）
 - 下石川平野遺跡農道27号第8号溝跡掘方底面（掘削痕の形状：三日月状。埋没過程で白頭山-苦小牧テフラが堆積。第7号溝跡と重複し、第8号溝跡が古い。）
 - 下石川平野遺跡配水管16号第9号溝跡掘方底面（掘削痕の形状：三日月状。）
 - 郷山前村元遺跡第1号溝跡掘方底面（掘削痕の形状：半円状、三日月状※3。部分的に検出。第3号円形周溝（埋没過程で白頭山-苦小牧テフラがレンズ状に堆積）より新しい。）
- 本遺跡周辺では上記4遺跡6遺構の掘方底面から掘削痕が検出されている。掘削痕の形状は6遺構全て、概ね三日月状や半円状を呈している。加えられた力の強弱や角度の違いによると思われる大きさのばらつきは、どの遺構でも見られるが、それらの形状も概ね似ていることから同じような金属工具を使って掘削していた可能性が高い。

野尻（1）遺跡第306号建物跡外周溝跡と下石川平野遺跡農道27号第7号溝跡例は本遺跡の第1号溝跡同様、白頭山-苦小牧テフラが埋没過程で堆積しているという類似点が認められる。また、下石川平野遺跡農道27号第8号溝跡も、同第7号溝跡と新旧関係にはあるものの火山灰の堆積状況が比較的似ている。同じく掘削痕を有する溝跡と重複する郷山前村元遺跡第3号円形周溝も埋没過程で白頭山-苦小牧テフラが堆積している。下層に十和田a火山灰の堆積が認められることからも、これらの遺構は、それほどの時間差がなく構築・使用・廃絶が行われた可能性が高いものと思われる。野尻（1）遺跡、下石川平野遺跡、郷山前村元遺跡、中平遺跡は本遺跡から直線距離で、それぞれ3.2km、2.3km、1.4km、0.7km離れており、比較的近距離に位置していることが図1や表1からも確認できる。竪穴建物跡以外の遺構も各集落間で関係性を持ちながら存在していたものと思われる。

※1 農道10号第1号a建物跡・農道10号第1号b建物跡・農道2号第5号建物跡・農道2号第4号建物跡・農道10号第3号A建物跡(古)・農道10号第3号B建物跡(新)・農道10号第3号C建物跡・農道1号第2号建物跡(古)・農道1号第2号建物跡(新)・農道8号第2号建物跡・農道11号第5号竪穴住居跡・農道2号第6号建物跡・農道2号第1号建物

跡・農道10号第6号建物跡・農道9号第5号建物跡・農道11号第1号建物跡 ※2・3 事実記載と写真図版から推定。

第2節 各時代の土地利用

1 縄文時代

調査区から散漫に縄文時代早～前期、後期の土器片や石器が出土している。遺物に伴う遺構は検出していないことから、縄文時代における土地利用度は比較的低かったものと思われ、今回の調査区は周辺集落の縁辺や狩猟・採集域の周辺部であった可能性が考えられる。出土した遺物は当時の人々の何らかの行動に起因するものと思われる。

2 古代

古代、特に平安時代は周辺地域も含め人々の行動が活発になった時期で、調査区からは竪穴建物跡1棟、溝跡3条、土坑1基、掘立柱建物跡1棟を含む柱穴・ピット7基を検出し、遺構内外から土師器、須恵器、鉄滓が出土している。検出した溝跡2条（第1号溝跡・第3号溝跡）を境にして、その他の遺構は一方（第1号溝跡からは南西側、第3号溝跡からは西側）からのみ検出している。古代の溝跡はこれまでの類例から、排水施設や集落の縁辺に造られた境界としての機能が考えられており、本遺跡では遺構の検出状況から後者の意味合いが強いものと考えられる。溝跡2条では新旧関係が推定され、平安時代においては少なくとも2時期の集落変遷があり、その集落の主体は古い第3号溝跡では同遺構を境に西方域に、新しい第1号溝跡では同遺構を境に南西方域にあったものと考えられる。また、鉄滓（楕円鍛冶治）が1点出土している。調査区内や竪穴建物跡内からは関連する炉跡・羽口・鉄製品等は出土していないが、今回見つかった竪穴建物跡を含む集落内では生業の一つとして鍛冶が行われていた可能性が考えられる。

3 近世

調査区から陶磁器片が5点出土しているが、それらに伴うと考えられる遺構は検出されていない。本遺跡の約1.0km南西側を江戸時代に整備されたと考えられる「下之切通り（小泊道）」が南北方向に通っており、江戸末期・嘉永五年（1852）以降に作られ、現在、弘前市立博物館に所蔵されている『郷山前村漆山絵図※』には街道沿いや村中に至る道沿いに「漆木山」と漆が栽培されていたことが記載されている。近世郷山前村で暮らしていた人々の住居は「下之切通り」から西側に2本程分かれた道沿いと、それを東西方向に横切る道沿いに造られていたことが絵図からうかがえる。本遺跡が立地する一帯にも当時弘前藩から栽培が推奨されていた漆の栽培地が広がっていた可能性も考えられるが、絵図に描かれた現在の熊沢溜池と考えられる周辺には、道路を挟み北隣の近世吉野田村に所在する「漆木仕立山」以外に記載は見当たらない。「下之切通り」から更に東に離れた今回の調査区周辺は、まだ開発が及ばない区域、或いは開墾され畠・苗代・入会地等が造られていた可能性も考えられる。また、周辺に発達した小谷を堰き止めた溜池の上・下域には水田が作られていた可能性も考えられる。

4 近・現代

現在、調査区を含む一帯はりんご栽培を主とした果樹園として利用されている（図2・図版1下）。りんご園ではこれまでに新品種への更新に伴う苗木の植え替えや矮化等、栽培方法の変更も幾度か行われており、調査区でもそれらに関係すると考えられる痕跡が確認されている。今回の調査区は同一の園地を分断するように設定されている。両隣に現存する果樹の配置からも、それらは東西及び南北方向には

ば等間隔で整然と並んでおり、りんごの植栽や支柱が残る矮化栽培の痕跡だということが判明した。園地の持ち主や周辺地権者からの情報によると、調査区を含む周辺では、りんご園が造られる以前、戦後の農地解放までは赤松が植林されていたというが、それらに関連する痕跡は明確には分からなかった。しかし、北東部を中心として調査区内から多数検出された、りんご植栽痕以外の痕跡が、それらに該当する可能性がある。また、本遺跡が立地する段丘の東に形成された小谷では平成17年まで水田耕作が行われていたが、その後は現在まで耕作放棄地となっていることも判明した。

以上のことから、今回の調査区の平坦部については近・現代にかけて針葉樹の植林や果樹栽培に利用され、小谷部分については近世には行われていた可能性もある水田耕作に利用されていたものと思われる。また、第1号竪穴建物跡の竪穴部分のほとんどが削平されていた状況から、調査区周辺は植林や果樹園造成に伴い、掘削を含む土地改変が行われた可能性が高いことが推定できる。縄文時代や平安時代の地形は少なからず現在とは異なっていた可能性が高く、欠失した遺構や遺物も多数存在していたものと思われる。

※『浪岡町史』別巻1 P14、『上野遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第486集 P107 参照

引用・参考文献

浪岡町 2000『浪岡町史』第1巻

浪岡町 2002『浪岡町史』別巻1

青森県教育委員会 1984『下之切通り（小泊道）』青森県「歴史の道」調査報告書

青森県教育委員会 1980『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書 第57集

青森県教育委員会 1987『山本遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第105集

青森県教育委員会 1994『山元（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第159集

青森県教育委員会 1995『山元（2）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第171集

青森県教育委員会 1995『木水館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第173集

青森県教育委員会 1996『野尻（2）II・（3）・（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第186集

青森県教育委員会 1997『高屋敷館遺跡発掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書 第206集

青森県教育委員会 1998『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第243集

青森県教育委員会 2001『桜ヶ峰（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第299集

青森県教育委員会 2003『野尻（1）遺跡V』青森県埋蔵文化財調査報告書 第351集

青森県教育委員会 2003『宮元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第359集

青森県教育委員会 2004『野尻（1）遺跡VI・野尻（2）遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書 第366集

青森県教育委員会 2004『宮元遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第380集

青森県教育委員会 2005『高屋敷館遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書 第393集

青森県教育委員会 2005『山元（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第395集

青森県教育委員会 2006『野尻（3）遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第414集

青森県教育委員会 2007『赤平（2）遺跡・赤平（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第438集

青森県教育委員会 2008『上野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第445集

青森県教育委員会 2008『寺屋敷平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第450集

- 青森県教育委員会 2008『荒屋敷久保（1）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第453集
- 青森県教育委員会 2009『中平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第474集
- 青森県教育委員会 2010『上野遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第486集
- 青森県教育委員会 2010『中平遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第490集
- 青森県教育委員会 2012『中平遺跡III』青森県埋蔵文化財調査報告書 第518集
- 青森県教育委員会 2015『下石川平野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第556集
- 青森県教育委員会 2016『下石川平野遺跡II・旭（1）遺跡・旭（2）遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第569集
- 青森県教育委員会 2016『下石川平野遺跡III・浪岡螢沢遺跡・旭（2）遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書 第583集
- 青森県教育委員会 2018『熊沢溜池遺跡・上野遺跡III・郷山前村元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第591集
- 青森県教育委員会 2021『青森県遺跡詳細分布調査報告書33』青森県埋蔵文化財調査報告書 第624集
- 五所川原市教育委員会 2003『五所川原須恵器窯跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書第25集
- 五所川原市教育委員会 2005『KY1号窯跡「五所川原須恵器窯跡」における初現期窯跡の発掘調査報告書』五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第26集
- 五所川原市教育委員会 2013『十三盛遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第33集
- 浪岡町教育委員会 1990『大沼遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 第4集
- 北日本須恵器生産・流通研究会 2007『五所川原産須恵器の年代と流通の実態』第2回「北日本須恵器生産・流通研究会」資料集
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念

表2 縄文土器観察表

図 番号	出土地点・ グリッド	層位	器種	部位	時期・型式	備考	
15. 1	SD01	深鉢	口縁部	早期後葉：赤褐色	口輪底：LR 制。(柳回転)	胎上に繊維混入	
15. 2	—	第1層	深鉢	口縁部	早期後葉：赤褐色	口輪底：LR 制。(柳回転)	胎上に海綿骨質混入
15. 3	—	第1層	深鉢	口縁部	早期後葉：赤褐色	口輪底：LR 制。(柳回転)	胎上に繊維混入
15. 4	G-18	規乱	深鉢	側面	早期後葉：赤褐色	8.1: 口縁部 (柳回転) 胎上に繊維混入	
15. 5	■ 24II 1倍直 第1層	規乱	深鉢	側面	早期後葉：赤褐色	8.1: 口縁部 (柳回転) 胎上に繊維混入	
15. 6	—	第1層	深鉢	側面	早期後葉：赤褐色	8.1: 口縁部 (柳回転) 胎上に繊維混入	
15. 7	T-9	理筋土	深鉢	側面	早期末～中期初頭	外: LR 制 (柳回転)	胎上に繊維混入
15. 8	武綱 T-9	理筋土	深鉢	側面	中期末～中期初頭	外: LR 制 (柳回転)	胎上に長石粒・褐色粘混入
15. 9	SD01	土層(-7.3層)	深鉢	側面	中期末～中期初頭	外: LR 制 (柳回転)	胎上に長石粒・褐色粘混入
15. 10	—	第1層	深鉢	側面	中期末～中期初頭	外: LR 制 (柳回転)	胎上に長石粒・褐色粘混入
15. 11	G-19	規乱	深鉢	側面	早期末～中期初頭	外: LR 制 (柳回転) 胎上に多量の褐色粒・繊維混入	
15. 12	—	第1層	深鉢	側面	前期初頭	外: LR、内: マガラ	胎上に長石粒・繊維混入
15. 13	SP09	堆積土	口縁～胴部	後期前葉：土縫内1層	縫隙：1条側位沈継、側部：円形沈継・長方形沈継		
15. 14	G-16	規乱	鉢	側面	後期前葉：土縫内1層	縫隙：1条側位沈継、側部：数条側位沈継	
15. 15	G-16	規乱	深鉢	側面	後期前葉：土縫内1層	縫隙：2条側位沈継	

表3 石器観察表

図 番号	出土地点・ グリッド	層位	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
16. 1	—	規乱	剥片石器	剥片	3.2	3.4	1.0	7.0	珪質直岩	
16. 2	—	第1層	剥片石器	剥片	4.6	4.5	1.2	16.8	珪質直岩	一部自然面
16. 3	—	規乱	礫石器	磨凸	8.4	8.1	2.7	290.4	安山岩	1側面使用
16. 4	P-14	第1層	礫石器	三角柱状磨凸	(7.6)	6.0	5.3	(276.2)	安山岩	3側面使用

表4 土師器・須恵器・陶磁器観察表

図 番号	出土地点・ グリッド	層位	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	備考
17. 1	SI01	貼床内	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 2	SD01	堆積土	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 3	SD01	堆積土	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 4	SD01	堆積土	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 5	SD02	地中出向	土師器	壺	口縁部	—	—	—	ロクロ	ロクロ	内面黒色処理ミガキ
17. 6	SD02	地中出向	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 7	SD03	堆積土	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 8	SP-25	堆積土	土師器	壺	側面	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 9	H-17	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ
17. 10	—	第1層	土師器	壺	口縁部	—	—	—	ロクロ	ロクロ	ロクロ
17. 11	—	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 12	E-17	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 13	E-18	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 14	I-17	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
17. 15	E-17	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 1	—	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 2	P-20	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 3	—	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 4	—	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 5	—	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 6	—	第1層	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 7	—	第1層	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 8	E-17	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 9	—	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 10	—	第1層	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 11	E-18	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
18. 12	G-18	規乱	土師器	壺	口縁部	—	—	—	—	—	ヘラナデ
19. 1	出土地点・ グリッド	層位	種別	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外面	内面	備考
19. 2	E-17	規乱	須恵器	壺	口縁部	—	—	—	ロクロ	ロクロ	火葬痕
19. 3	E-17	規乱	須恵器	壺	口縁部	—	—	—	ロクロ	ロクロ	火葬痕
19. 4	—	規乱	須恵器	壺	口縁部	—	—	—	格子印彫目	当て貝殻	外側自然釉
19. 5	—	規乱	須恵器	壺	口縁部	—	—	—	並行印彫目	—	外側自然釉
19. 6	—	第1層	陶磁器	碗	口縁～全体部	—	—	—	—	—	—
19. 7	—	第1層	陶磁器	碗	全体部	—	—	—	—	—	—
19. 8	E-18	規乱	陶磁器	碗	全体部	—	—	—	—	—	草花文様
19. 9	D-18	第1層	陶磁器	碗	全体部	—	—	—	—	—	草花文様

表5 鉄滓観察表

図 番号	出土地点・ グリッド	層位	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
19. 5	E-18	規乱	輪縁鏡沿	輪縁鏡	(5.4)	(5.5)	(2.4)	(56.0)	磁着度6・メタル度4~5



遺跡上空から望む津軽平野と岩木山



調査区と周辺の現況

図版1 航空写真



調査区南西側で検出した遺構



基本層序

図版2 調査区



第1号竪穴建物跡全景 南東→



第1号竪穴建物跡土層断面 南東→

図版3 第1号竪穴建物跡（1）

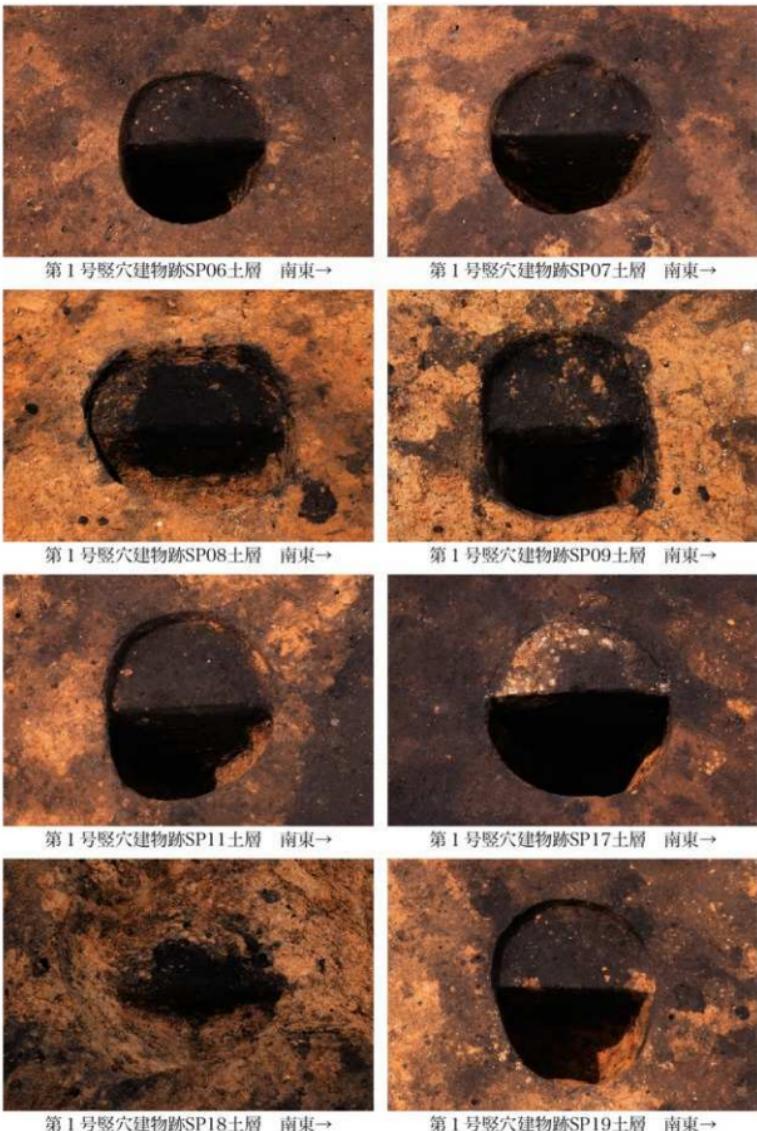


第1号豎穴建物跡貼床の残存状況 東→



第1号豎穴建物跡作業状況 南→

図版4 第1号豎穴建物跡 (2)



図版5 第1号竪穴建物跡（3）



第1号溝跡検出 北東→



第1号溝跡土層 A-A' 西→



第1号溝跡土層 B-B' 西→



第1号溝跡土層 C-C' 西→



第1号溝跡土層 D-D' 西→

図版6 第1号溝跡(1)



第1号溝跡土層 E-E' 南西→



第1号溝跡土層 F-F' 南東→



第1号溝跡掘方完掘 東→



第1号溝跡完掘（工具痕検出） 西→



第1号溝跡作業状況 西→

図版7 第1号溝跡（2）



第3号溝跡検出 南→



第3号溝跡土層 A-A' 南→



第3号溝跡土層 B-B' 南→

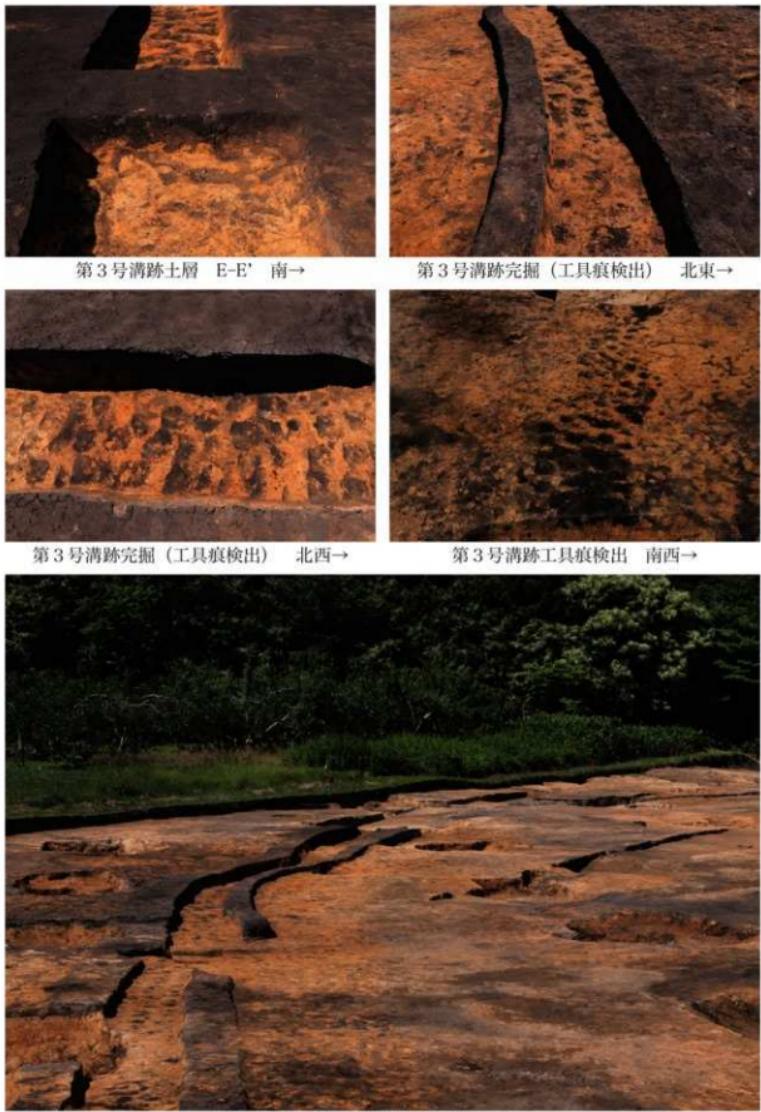


第3号溝跡土層 C-C' 南→



第3号溝跡土層 D-D' 南西→

図版8 第3号溝跡 (1)



図版9 第3号溝跡（2）



第3号溝跡完掘（工具痕検出） 北東→

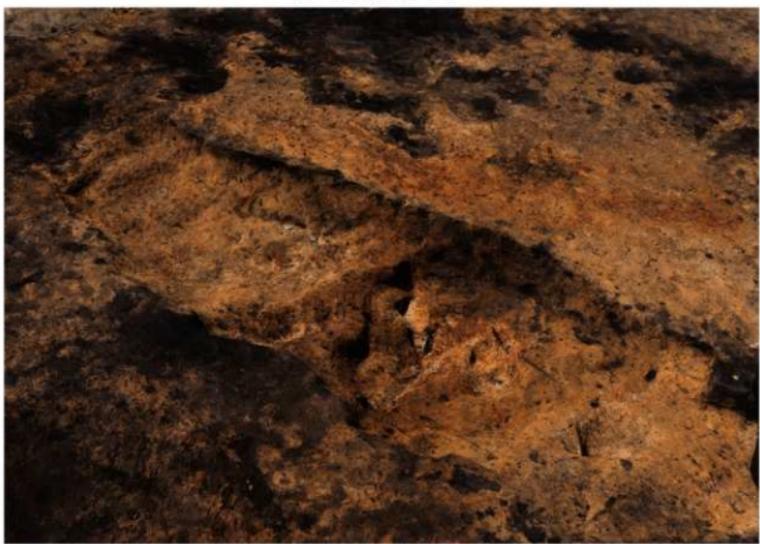


第3号溝跡完掘（工具痕検出） 北東→

図版10 第3号溝跡（3）



第4号溝跡土層 西→



第4号溝跡完掘 南東→

図版11 第4号溝跡



第1号土坑土層 北西→



第1号土坑完掘 南東→

図版12 第1号土坑



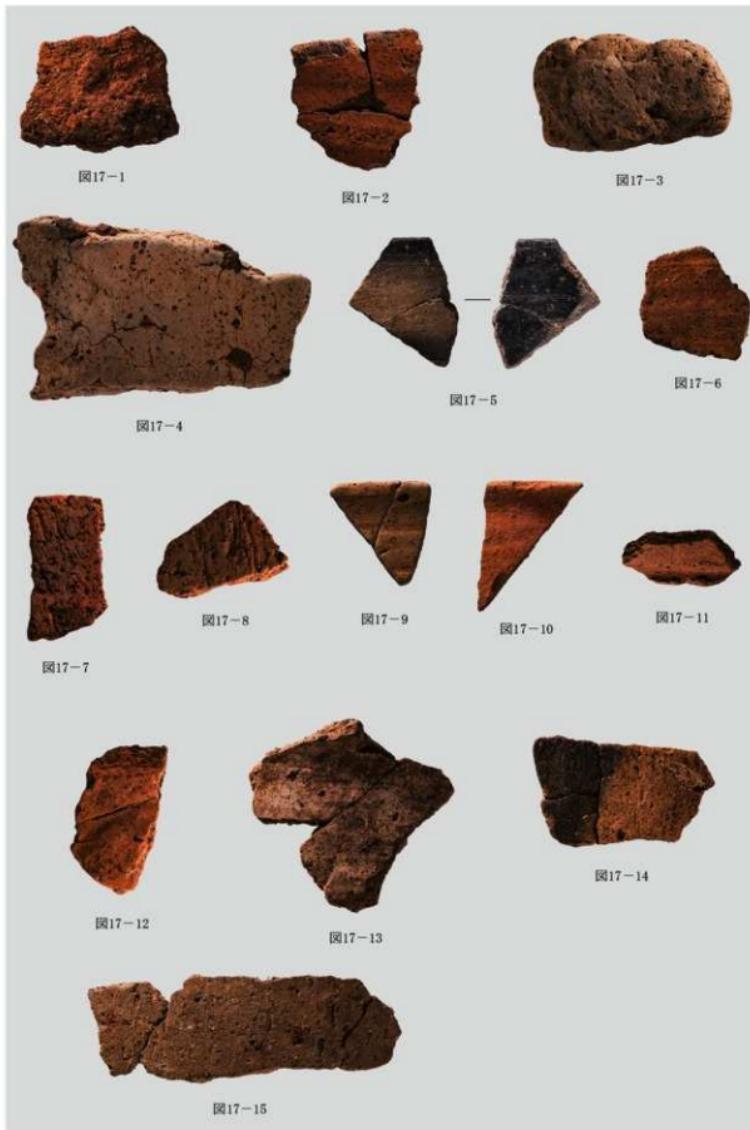
図版13 第21・22・23・25号柱穴・ピット（第1号掘立柱建物跡）



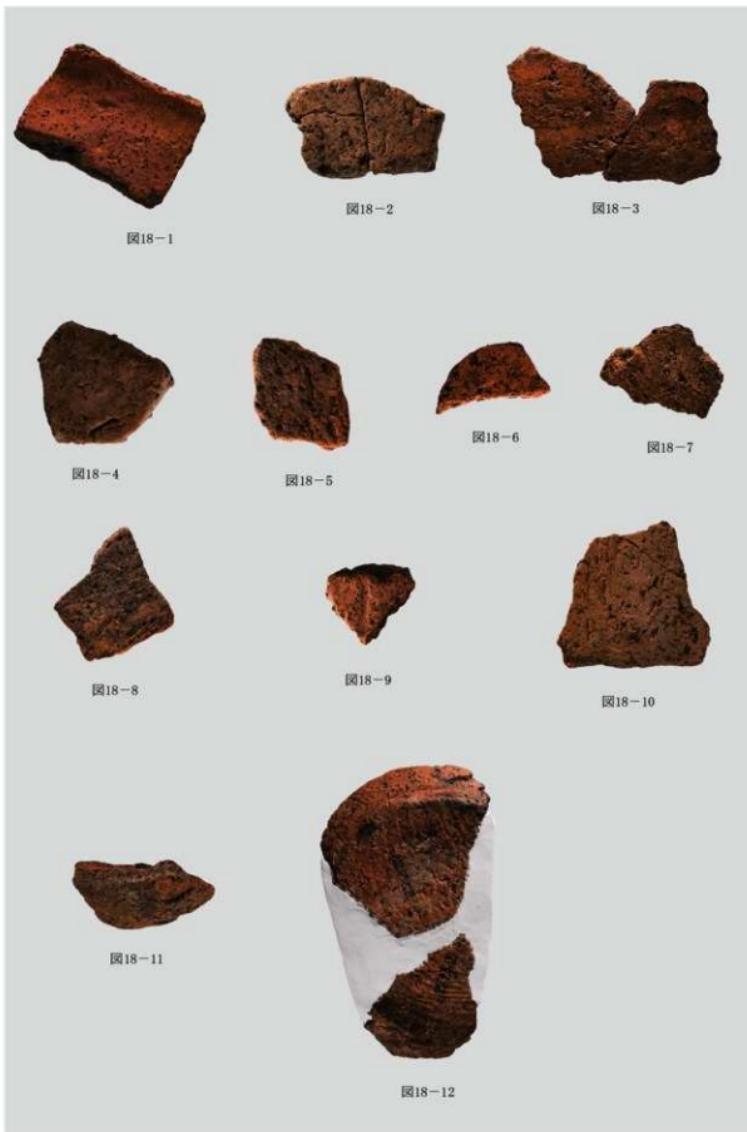
図版14 第24・26・27号柱穴・ピット



図版15 出土遺物（1）



图版16 出土遺物 (2)



図版17 出土遺物（3）



図版18 出土遺物（4）

報告書抄録

青森県埋蔵文化財調査報告書 第635集

樽沢村元(3)遺跡

—常海橋銀線道路改築事業に伴う遺跡発掘調査報告—

発行年月日 2023年3月15日
発 行 青森県教育委員会
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森県青森市大字新城字天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印 刷 第一印刷株式会社
〒038-0003 青森県青森市石江字江渡3-1
TEL 017-782-2333代 FAX 017-781-9153

この印刷物は300部作成し、山崎経費は1部当たり4,070円(うち顔負担2,239円)です。